

明治日本の『ルバイヤート』

杉田 英明

〔目次〕

- 一 フィッツジェラルド訳の成立
- 二 初期の言及
- 三 ラファディオ・ハーンと上田敏の紹介
- 四 蒲原有明の初訳
- 五 石澤氷湖の全訳
- 六 大住嘯風の全訳
- 七 蠣瀬彦藏の『おまあかいやむ四行歌 百句』

ペルシア詩人ウマル・ハイヤーム‘Umar Khayyām⁽¹⁾（一〇四八―一二三一年）の『ルバイヤート』*Rubāʿiyyāt*（四行詩集⁽²⁾）は、アラブ世界の説話集『アラビアン・ナイト』‘*Alf Layla wa Layla*（千一夜物語）と並んで、現在、世界で最も名の通った中東世界の文学作品と言つてよいであろう。『アラビアン・ナイト』が世界文学

の一つに数えられるようになったきっかけが、フランスの東洋学者ガラン Antoine Galland（二六四六―一七二五年）の仏訳であったように、『ルバイヤート』と詩人ウマルの名を世界に広めたのも、イギリスの詩人フィッツジェラルド Edward FitzGerald（一八〇九―一八三三年）の英訳によるところが大きい。日本でも明治以来、『ルバイヤート』はこのフィッツジェラルド訳を媒介に、英文学の一環として受け入れられる傾向が強かった。本稿では、その初期の翻訳と受容の様相を概観してみよう。

一 フィッツジェラルド訳の成立

フィッツジェラルドはロンドンの東北、サフォーク州ウッドブリッジの裕福な家庭に生まれ、ケンブリッジ大学のトリニティ・カレッジを卒業、その後定職には就かず、ロンドンやサフォーク州の郷里で閑雅な一生を送った文人である。⁽³⁾小説家の

サッカー William Makepeace Thackeray (一八一一年—一八四三年) や詩人 テニス Alfred Tennyson (一八〇九年—一九二九年) ら、同窓の友人との親交でも知られている。三十五歳の彼をペルシア文学の世に引き込んだのは、十七歳年下の友人、カウエル Edward Byles Cowell (一八二六年—一九〇三年) であつた。

カウエルはサフォーク州イプスウィッチの出身、グラマースクール時代にギリシア語、ラテン語、フランス語を習得し、のちにはスペイン語、イタリア語、ペルシア語、サンスクリットを独学で修めている。オックスフォード大学モードレン・カレッジを卒業後、一八五六年にはカルカッタのプレジデンス・カレッジの現代史・経済学教授、六七年にはケンブリッジ大学の初代サンスクリット学教授に任命された。フィッツジェラルドとの親交が始まったのは一八四四年である。一八五〇年、フィッツジェラルドは彼からスペイン語の指導を受け始め、その成果として一八五三年、『カルデロンの戯曲六篇』*Six Dramas of Calderon. Freely Translated by Edward Fitzgerald* (London: William Pickering) を上梓している。また、一八五二年にはペルシア語学習を開始、カウエルを指南役としながら、ジョーンズ William Jones (一七四六年—一八四四年) の『ペルシア語文法』*A Grammar of the Persian Language* (Fourth Edition, London: Printed for J. Murray, S. Highley, and J. Sewell, 1797) を利用して少しずつ勉強を続けた。

学習の成果が最初に形となったのは、一八五六年に私家版として刊行された翻訳『サラマーンとアブサル』*Salāmān and Absāl: An Allegory Translated from the Persian of Jāmī* (London: Bun-

day) である。これは、十五世紀ペルシアの神秘主義詩人ジャミー 'Abd al-Rahmān Jāmī (一四一四—一九二二年) による哲学的寓意詩の自由訳であつた。この前後、カウエルはオックスフォード大学ボドレー図書館で、ウマル・ハイヤームに帰せられた『ルバイヤート』百五十八首——イスラム暦八六五年(西暦一四六〇—一年)にシーラーズで筆写。東洋学者ウーズレー William Ouseley (一七六七—一八四二年) 蒐集の写本 (MS Bodley No. 525; Ouseley Collection No. 140) ——を発見、その写しをフィッツジェラルドに贈っている。そして、これを置き土産に、彼は同年八月、カルカッタに赴任した。ちなみに、ボドレー写本は現存する最古の写本として知られており、フィッツジェラルドとこの写本との出会いは、『アラビアン・ナイト』の最初の翻訳者ガランが偶然入手したのが現存する最古の十四世紀写本であつたことも対応する、興味深い事実である。

さて、フィッツジェラルドは十一月に亡友バートン Bernard Barton (一七八四—一八四九年) の娘ルーシーと結婚するが、八か月で破綻。カウエル夫妻が去った後の寂しさと離婚の痛手とを紛らすため、彼が集中したのが『ルバイヤート』の翻訳であつた。彼は、翌年にカウエルが送ってくれたカルカッタのベンガル・アジア協会図書館所蔵写本 (MS No. 1548. 五百十六首収録) や、フランスの東洋学者ガルサン・ド・タッスイ Joseph E. S. V. Garcin de Tassy (一七九四—一八七八年) との文通のなかで得た情報をも利用し、解釈においてはつねに手紙によってカウエルの助言を求めながら、最初はラテン語に、続いて英語への翻訳を続け

た。五八年一月、まず三十五首を『フレイザーズ』Fraser's Magazine 誌に送ったが、一年間掲載されないままであるあいだ、フィッツジェラルドの方はさらに改訂と増補を行ない、七十五首の翻訳に序文および注を付し、一九五九年三月にクオリッチ Bernard Quaritch (一八一九—一九九九年) の古書店から匿名の私家版 (二百五十部) としてこれを刊行した。『オーマー・カイヤームのルバイヤート』Rubā'iyāt of Omar Khayyām 第一版である。

最初の二年間、この翻訳はほとんど売れず、読者の注目を集めることもないまま、ロンドンの古書店クオリッチの軒先の均一本の函のなかに埋もれていた。ところが、一八六一年七月、ケルト学者ストークス Whitley Stokes (一八三〇—一九〇九年) がたまたまこれを見つけ、友人である画家・詩人のロセッティ Dante Gabriel Rossetti (一八二八—一八八二年) に見せたところ、彼はたちまちその価値を見抜き、詩人のスウィンバーン Algernon Charles Swinburne (一八三七—一九〇九年) とともにさらに何冊かを求めて書店を訪れた。以後、ウィリアム・モリス William Morris (一八三四—一九六六年)、バーンズ Edward Burne-Jones (一八三三—一九八八年) といったラファエル前派の画家たちや、小説家ジョージ・メレディス George Meredith (一八二八—一九〇九年) らの称讃を通して訳詩集の評価は高まっていた。一八六六年、クオリッチは在庫が十冊になったと言って増刷を持ちかけている。

しかし、フィッツジェラルドの方は増補改訂を考えていたので、単純な増刷は許さなかった。そのうち、六七年にパリで東

洋学者のニコラ Louis Jean Baptiste Nicolas (一八一四—一八七五年) が、テヘランで一八六一年に出された石版本に基づき、四百六十四首の原典を対訳付きで刊行⁽⁴⁾、その序文と注釈で、ウマル・ハイヤームが神秘主義者であるとする見方を主張した。これは、ハイヤームを快楽主義者・懷疑論者と見做すフィッツジェラルドの姿勢とは相容れないものであった。フィッツジェラルドはニコラ版から新たに二首を原典として採用すると同時に、他の写本からの付加や第一版の改訂をも含め、合計百十首を第二版 (匿名、私家版、二百部) として同じ書肆から一八六八年に上梓した。その序文の末尾には、ニコラの主張への反駁が付け加えられている。

第二版以降、合衆国での需要が増大したことも相俟って、クオリッチはさらに増刷を要求、対するフィッツジェラルドは相変わらず増補改訂に固執した結果、一八七二年には百一首を含む第三版、七九年にはやはり百一首から成る第四版 (いずれも匿名、各二百部) が刊行された。第三版と第四版のあいだには、それほど大きな変更は見られない。ただ、第四版にはかつて刊行した翻訳『サラーマーンとアブサール』の改訂版も付加されている。訳書の名声が高まっても、フィッツジェラルドの私的な生活は以前とまったく変わらず、サフォーク州の田舎での閑居を楽しみ、八三年六月、客として招かれたノーフォーク州マートンの友人の家で睡眠中に息を引き取った。歿後の八九年には、第四版への彼の書き込みを生かし、最後の意志を体现すると称する——実際には彼自身のものではない修正が含まれて

いる——「第五版」も刊行された。

フィッツジェラルドの『ルバイヤート』翻訳は、世紀末から二十世紀にかけて、さまざまな刊本が海賊版も含め多数出現し、英語圏読者の熱狂を煽り立てた。その一方では東洋学者の関心をも惹き、ウマル・ハイヤーム研究が活性化すると同時に、新たな写本の探索や原典版の校訂・翻訳が相次いだ。右に触れたニコラ以後、イギリスのホワインフィールド E. H. Winfield (一八八三年、五百首^③) やヘロン＝アレン Edward Heron-Allen (一八九八年、百五十八首^⑥) に始まり、近くはイランの小説家サーデク・ヘダーヤト Šādeq Hedāyat (一九三四年、百四十三首^⑦) やモハンマド・フォルギー Mohammad Forūghī およびカーセム・ガニー Qāsem Ghānī (一九四二年、百七十八首^⑧) の校訂版にまで及んでいる。これらのルバイイーの収録数の多様性からも窺われる通り、ウマル・ハイヤームの真作の判別は今日に至るまで未解決の問題とされ続けている^⑨。

フィッツジェラルド訳が読者に広く迎えられた理由としては、それが原典に即した逐語訳ではなく、むしろ創造的解釈を加えた自由訳であった点に加え、各詩編が独立性を保ちながらゆるやかに結合し^⑩、全体として一つの物語を形成している点を挙げねばならない。これは、脚韻のアルファベット順に機械的に排列するのが一般的なペルシア語詩集と比べた場合、きわだって対照的なフィッツジェラルド訳の特徴である。すなわち、冒頭の第一歌は払暁の目覚めとともに始まり、最後は夜の月が昇る情景で締め括られる。このあいだの詩人の一日の生活が「移ろ

いゆく時の観念」the Idea of Time passing とともに⁽¹¹⁾、各詩編によって表現される。これをフィッツジェラルド自身、「オーマーは明け方、かなり冷静かつ瞑想的な気分が登場し、やがて思索と飲酒が進むにつれて無礼で冒瀆的になり、その後日没とともに再び憂鬱のなかに沈んでゆく^⑪」と表現している。こうした意図がどれほど実現しているかは別としても、読者は最初から最後まで、物語を読むように訳詩を通読することができらるだろう。

また、フィッツジェラルドが提示した享楽主義者・懷疑論者としてのハイヤーム像について言うなら、それが当時のヴィクトリア朝、より広くは世紀末ヨーロッパ世界に広まりつつあった宗教への懷疑や、社会の爛熟とともに生じた頹廢的風潮と共鳴し、彼の翻訳を普及させる上で重要な要素となったことも忘れるわけにはゆかない。

二 初期の言及

日本でウマル・ハイヤームの名に言及した最も早い文献の一つは、イギリスの著述家エイヴベリー卿ラボック John Lubbock, Lord Avebury (一八三四年—一九一三年) による『人生の愉楽』*Pleasures of Life* (一八八七年) の邦訳、澁江保譯述『^{方針}幸福要訣』(一八九三年八月^⑫) であろう。同書は、その第四章「書物の選択」*The Choice of Books* の末尾に良書百選を収めていることで知られ、中東関係では『コーラン』抜粋やペルシア詩人フィルドウスィー Firdawsī (九三四—一〇二五年) の『王書』、『アラビアン・ナイト』

などが選ばれている。ここにウマル・ハイヤムを加えなかったことについて、ラボックは本文中で、

或は予に向て、^{オマーカイヤム} Omar Khayyam を加ふべしと勸むるものあらん。然れども、表中餘裕なきを以て、之を省けり。⁽¹⁵⁾

と弁解しているが、澁江訳を原文と比べると、「然れども」以下は訳者の付加であることが判る。『人生の愉楽』は、明治から大正にかけて繰り返し翻訳され、学校の英語副読本としても利用されたほどなので、ウマルの名を知らしめるのにそれなりに貢献したことであろう。⁽¹⁵⁾

これに続く言及として挙げられるのが、宗教学者・姉崎正治^{あねざき まさはる}（嘲風。一八七三―一九四九年）の「最近の波斯文學」（一八九六年二月）である。これは、「獨逸東洋學會誌の所載に係る」と断わっているように、ドイツの東洋学者フォン・ケーグル Alexander von Kégl の「十九世紀ペルシア文学史について」と題する論考⁽¹⁷⁾の要約・紹介である。カージヤール朝の宮廷詩人カーアーニー Habīb 'Allāh Qā'ānī（一八〇八―一八五四年）の詩を紹介した一節で姉崎は、

快樂主義は波斯にてオマルヘツジヤム以來の流行にして近世の文人多く之に陥れり、カーニー（カーアーニー）亦之に背かず酒を好み泥酔に至るを以て快とせり。⁽¹⁸⁾

と記している。ただし、ここでも「オマルヘツジヤム」「Omar Fejām」は付随的な言及にすぎず、具体的にその作品を紹介しているわけではない。

もう一つ、やはり断片的な言及として、内田魯庵（一八六八―一九二九年）の「樓上雜話」（一九〇三年一月）を挙げることができる。このエッセイで魯庵は、ヨーロッパにおける「珍書掘出しの奇話」をあれこれと並べるなかで「フ井ツツゲラルドの初版」にも触れ、次のように記す。

△フ井ツツゲラルドと云へば誰しもオマルカイヤムを憶出すだらう。此オマルカイヤムを出版したのはクオリツチだが、少しも賣れないので持餘して残本を一ペニー擇取りの箱へ入れて店へ出した。⁽¹⁹⁾で、いつとなくドウカコウカ賣つて了つた。處が夫から三十年、フ井ツツゲラルドの評判高く、殊にオマルカイヤムの初版は著るしく騰貴したので、クオーリツチは最初一ペニーで賣つたものを今度は二十磅宛で買込んださうである。⁽¹⁹⁾

魯庵がこの逸話をどこから引用したのかは定かでないが、例えばヘロン・アレレン（一八六一―一九四三年）の『エドワード・フィッツジェラルドの詩に対するいくつかの側面光』（一八九八年）には、一八九八年二月十日の古書売り立てにおいて、クオリツチが『ルバイヤート』初版本を二十一ポンドで落札したという目撃談が記されている。⁽²⁰⁾

いずれにせよ、これらは『ルバイヤート』そのものの紹介には至っておらず、実際にフィッツジェラルドの英訳を通してその内容が知識人に知られるようになるためには、ハーン *Lectures on Hearn* (小泉八雲。一八五〇—一九〇四年) の講義と、その影響を受けた上田敏 (一八七四—一九一六年) の活動を待たねばならなかった。

三 ラフカディオ・ハーンと上田敏の紹介

ハーンは東京帝國大學での八年間に亘る講義 (一八九六—一九〇三年) のあいだに二回、ウマル・ハイヤームと『ルバイヤート』を取り上げている。受講生の筆記をもとに編輯された講義録『文学の解釈』*Interpretations of Literature* (一九一七年) には、その第二回目の講義の内容が「第二十一章 エドワード・フィッツジェラルドと『ルバイヤート』として収録されている⁽²¹⁾」その内容は違つて居るが、二回くりかへされた⁽²²⁾ という講義の年次は明示されていないが、おそらく第二回目は一九〇二年であろう⁽²³⁾。

この講義においてハーンは、フィッツジェラルドとウマルの生涯を略述したのち、おそらく第四版の百一首中から三十三首⁽²⁴⁾ を引用しつつ、それらの内容と思想を紹介している。そのさいは、ペルシア語由来の単語や表現——*Ferrāsh*, from *Māh to Māhi* (p. 308), *The Angel of the darker Drink*, *Sāki* (p. 315)——を⁽²⁵⁾ はじめ、固有の比喩——人生の比喩としての沙漠の隊商 (p. 308)、人形

芝居、幻燈、チェス盤 (p. 310)、神の球戯場 (p. 311)。優雅な少女の比喩としての糸杉 (p. 312)。美人の比喩としての新月 (p. 313) など⁽²⁶⁾——への説明を加えることも忘れてはいない。個々の四行詩について、必ずしも詳しい解釈が付されているわけではないが、ハーンの英文学講義に列した厨川白村 (本名は辰夫。一八八〇—一九二三年) がのちに「出版せられた講義集には説明解釋の部分は⁽²⁷⁾ 大抵省略されてゐる」と述べているので、教壇ではさらに解説が付されていたのかもしれない。ハーンは『ルバイヤート』で扱われる主題として、「人生の無常、死の謎、青春の衰退、説明不可能な事柄を説明しようとする哲学の愚かさ」⁽²⁸⁾ (p. 30) を挙げ、全体を貫く主張を一種の享樂主義 (Epicureanism) と汎神論 (Pantheism) であると結論づける (p. 319)⁽²⁹⁾。そして、インド哲学や仏教思想との類縁性を説くことで、日本人学生がこの作品に親しむきっかけを与えようとしている。白村が述べた「日本人の爲に、日本人の美感に訴へようとして説かれた西歐文學の講説⁽³⁰⁾」という講義録全体の特徴は、この章にもよくあてはまると言えるだろう。

ハーン門下では、上田敏と厨川白村の二人がともに後年、フィッツジェラルドの『ルバイヤート』原文を収めた詞華集を刊行しているのは興味深い。上田敏『ヴィクトリア朝の竖琴』*The Victorian Lyre* (丸善、一八九九年七月) と、厨川辰夫・矢野禾積編『十九世紀後半期英詩選』*The Later Nineteenth Century Poets* (奥付の標題は「英詩集」。積善館、一九二二年三月) がそれである。前者は第四版全百一首、後者は同じく第四版から六十五首を抜

粹して収めている。厨川の活動は大正時代にかかるので、ここではとくに上田敏と『ルバイヤート』の関わりを取り上げてみよう。

敏はハーンが東京帝國大學に赴任した翌一八九七年の七月に英文科を卒業して大学院に進学、八月には、『帝國文學』に寄せた論考「佛蘭西文學の研究」において早くもウマル・ハイヤームに触れている。その冒頭、文藝の研究者は世界文學の「支流」よりは「本流」「思潮の顯著なるもの」に着目すべきだとして、

フィルヅウシの『帝王編』を誦するよりは寧ろオマル、ケイ
ヤムの律語を翻へし、『聖ブランダン御作業』或は『シピオの
夢』よりはダンテの『神曲』を研究するを以て策の得たるもの
と稱す可し、⁽³⁾

と述べる一方、十月の『反省雜誌』「英詩管見」では、

又フヒツゼラルドの譯詩、『オマア、ケイヤム』の四行詩律
は、近世の詩人に感化を被らせしこと小少ならず、波斯大詩
人の懷疑思想、よく近世の思潮に合して、吾人の同情を惹く
に餘あり。これまた近英の詩歌中留心す可き者の一なり。⁽³⁾

として、この詩集への個人的な愛着を表明している。すでにこの時期からフィッツジェラルドの訳詩に親しんでいたことが窺われる。

右に挙げた『ヴィクトリア朝の豎琴』の刊行はこの二年後である。後年、彼はこの詞華集を回想しつつ、『ルバイヤート』の特徴について次のように記している。

其頃（十数年前）日本はまだ萬國版權同盟に加入してゐなかつた爲、余はかの韻語譯を東京に於て翻刻し、英文學近世の秀逸を紹介すると共に、東邦の薰高い波斯思想の一方面を仄かに暗示することを得た。（中略）

此詩形にては第一第二第四行の末に同韻を用ゐ、初の三行に意を述べて、末行は、心に釘打つ如く一首の結語となつてゐる。宛もわが短歌のやうに、これらの四行のみで、一の完全なる情意を述べ盡す詩形であるから、假令多數の四行詩を列記するとも、其間何等の連鎖があるのでは無い。（中略）唯この詩人の中心思想は全集を通じて一貫し、所謂近世の不可知論者の抱く世界觀に似てゐる。これは矛盾を矛盾とし、懷疑を懷疑とし、偏に心の誠を失ふまいとする抒情の聲であつて、第一に反抗の叫、第二に享樂の教、第三に絶念の悟、この三者が全曲の伴隨樂旨となつてゐる。舊約書中の「傳道の士」が、もつと若い時分、東邦宮殿の涼しい中庭に噴水の音を聴きつつ、沈靜なる思索の夢に耽つたなら、かういふ思想の詩人にもなつたらう、或はレオパルデイイをもう少し健やかにし、ルナンにやや意志の力を添へたなら、かかる人物が出来るかとも考へさせる。現代の人が、この古詩に接して、少からぬ共鳴を感じるのは、古くして常にまた新らしい人生

の大疑が美しい抒情の力によつて、一種の樂聲に浮ぶからである。⁽³³⁾

「萬國版權同盟」すなわち「文學的及美術的著作物保護萬國同盟創設ニ關スル條約」Convention de Berne pour la protection des œuvres littéraires et artistiques (ベルヌ條約。一八八六年九月九日調印)への日本の加入は一八九九年四月十八日、発効は七月十五日、⁽³⁴⁾『ヴィクトリア朝の豎琴』奥付によれば、印刷が七月十四日、発行が十七日とあるので、條約発効を意識しての駆け込みの刊行であつたことが判る。

ここで敏は、ハーンの分析をさらに敷衍する形で、「反抗」「享樂」「絶念」⁽³⁵⁾が詩集全体の「ライトモチーフ」であると、音楽への趣味と素養を生かして述べている。さらに、『旧約聖書』「コーヘレト(伝道者)の書」Qôhelethで「空の空、すべては空」と語つた「傳道の士」⁽³⁶⁾、「伊太利亞近世の大抒情詩家として、歴世の音特に高く、格調の美譬ふるに物なし」⁽³⁷⁾と評した詩人レオバルディ Giacomo Leopardi (一七九八—一八三七年)、「田園の詩を読み、牧歌蘆笛をきくの思あるナザレ村の叙景」⁽³⁸⁾を自ら讃えてやまない『イエス伝』Vie de Jésus (一八六三年)の著者ルナン Joseph-Ernest Renan (一八二二—一九〇二年)の三者を、あたかも「絶念」「反抗」「享樂」の代表者でもあるかのごとく引き合いに出して、詩集の魅力を伝えようとする。

右の詞華集刊行の翌一九〇〇年六月には、雑誌『太陽』が博文館創業十三年記念として編集した臨時増刊「十九世紀」の上

編「西洋」、第五部「文藝史」を担当し、その第一章「十九世紀の英文學」の「六 テニソンとブラウニング」の節でフィッツジェラルドにも触れている。

彼が名聲はひとへに天文學者にして詩人を兼ねたる彼斯のオマル、カイヤムガ四行詩律「ルバイヤット」の韻語譯(一八五九)に基けり。初版の時はさまで文壇の視聽を惹ざりしが、東邦の情趣を有し婉美の極を盡し、悲愁婉蕩相兼ねたる律語の響鳴は、永く文界の愛翫を空うせむや。近時「オマル、カイヤム俱樂部」設立せられ、紅薔薇をかざし葡萄の美酒をひかへて此律語を誦する者あり、「ルバイヤット」譯詩版を重ねること十九「盛名自ら因なくむばあらず。近英の詩をいふもの此奇才を逸する能はざるなり」⁽³⁹⁾。

フィッツジェラルド訳刊行の経緯やその後の反響、訳者歿後の一八九二年にロンドンで設立された「オーマー・カイヤム・クラブ」Omar Khayâm Club ⁽⁴⁰⁾などに関する情報は、当時すでに多く出されていた『ルバイヤット』諸刊本の編者による序文などから得たのであろう。

欧州外遊から帰国後、一九〇九(明治四十二年)五月に京都帝國大學教授に任じられた敏は、一九一三(大正二年)、京大英文學會主催の文藝講座「第一期 第一講(講讀)」として十一月から毎週金曜日、合計八回は、「Omar Khayâm's Rubaiyat」を講じている。⁽⁴¹⁾場所は京都「寺町丸太町上ル東側の洛陽教會」⁽⁴²⁾、使用し

たのは「初版七十五章」⁽⁴³⁾だったという。この講座に列した矢野峰人（本名は禾積^{かづみ}。一八九三—一九八八年）は「この講座に於ける上田先生の『ルバイヤート』講讀によつてはじめてオーマー・カイヤームの傳に接した」と回想している。矢野は先に挙げた『十九世紀後半期英詩選』を師の厨川白村とともに編纂したのみならず、のちに『ルバイヤート』の最も熱心な翻訳者・蒐集家となるのであるから、上田敏の貢献は大きかったと言わねばならない。

四 蒲原有明の初訳

ハーンと敏がフィッツジェラルド訳『ルバイヤート』本文の最も早い紹介者だったとしても、両者とも文章の形では日本語訳を残していない。その試みには、詩人・蒲原有明（本名は隼雄。一八七五—一九五二年）の登場を待たねばならなかった。有明と『ルバイヤート』との出会いは、上田敏の『ヴィクトリア朝の豎琴』を媒介とする。彼は後年の回想で次のように記している。

さうかうしてゐるわたくしの眼のまへには、また一つの變光星が出現して、思ひもかけぬ天の一方に、わたくしの好奇心を牽き去つた。上田博士編纂の『ヴィクトリアン・ライヤア』である。この書は量から云つても片々たる小冊子に過ぎない。丸善の發行である。それでも素朴で洒麗であつたとは

云へる。開卷第一にオマル・カイヤームの四行詩が載つてゐる。噂には少しつづ⁽⁴⁴⁾聞いてゐたが、このペルシアの原詩から英譯された『ルバイヤート』は初見夢である。わたくしは先づ感動した。その感動を記念すべく、わたくしをして一途に、その出現を變光星に擬せしめたのである。⁽⁴⁵⁾

当時の有明の興味の中心は、同書に十数編の詩が収められたロセッティ⁽⁴⁶⁾であつたと思われるが、その手前、巻頭に置かれたフィッツジェラルドの訳詩にも自ずと目が行つたのであるう。『ルバイヤート』から、彼の最初の訳詩一編が発表されるのは、それから八年後、一九〇七年三月の『文章世界』誌上である。フィッツジェラルドの原文（第四版第12歌）ともども引用してみよう。

歌の一卷樹のもとに、
美酒の壺、糧のやま、さては汝が
いつも歌ひてありといへ、その沙原に、
そや、沙原もまたの天國。⁽⁴⁷⁾

A Book of Verses underneath the Bough,
A Jug of Wine, a Loaf of Bread — and Thou
Beside me singing in the Wilderness —
Oh, Wilderness were Paradise enow!⁽⁴⁸⁾

英訳では、各行は弱強五歩格 (iambic pentameter) の韻律に則るとともに、ペルシア語ルバーイーに倣って、一・三・四句末の “Bough” “Thou” “enow” が /au/ の音で韻を踏んでいる。名詞をすべて大文字で始めるのは、やや古風な表記法で、ときに擬人化や抽象化の効果がある。しかし、用いられている単語に、とくに難解なものはない。最後の “enow” は “enough” と同義の古語。脚韻を合わせるために選んだ言葉であろう。パンと酒と詩集を携え、歌姫、あるいは友人——“Thou” だけからは男女の別は判断できない——とともに遠足に出れば、自分にとっては曠野も天国に思われるという、まさに「ペルシア庭園における一種のエピクロス風牧歌」 a sort of Epicurean Eclogue in a Persian Garden⁽⁵⁴⁾ の典型とも言ふべき一編である。有明訳においては、「一切れのパン」 a Loaf of Bread を「糧のやま」と改め、「壺」 A Jug には「もたひ」という十世紀以来の訓みを付し、さらに古語・詩語の二人称 “Thou” は、『續日本紀』の「宣命」に見られる古語「汝」——「いまし」より敬意が高いとされる二人称——を宛てている。「美酒」は、ちょうど一年ほど前に刊行された薄田泣菫 (本名は淳介。一八七七—一九四五年) の「白羊宮」冒頭の「ああ大和にしあらましかば」に登場する「美酒の甕」を意識している。音数は新体詩の基調である七五に依拠しつつも、「七五／七五七／七五七／七七」の変格になっている。なお、第三句「いつも歌ひてありといへ」は、『有明集』(一九〇八年一月) や『有明詩集』(一九二三年六月) では「いつも歌ひてあらばとよ」と改められるなど、以後も全体に亘る推敲が続けられた。

ここで溯って、フィッツジェラルドの英訳とペルシア語原典とを対照してみよう。英訳が直接依拠した原典は、ヘロン・アレンがつとに指摘した通り、ボドレー写本の百五十五番と思われる。

gar dast dehad ze-maghz-e gandom nān-i

az mey kadu-yī ze gūsfand-ī rān-i

v-āngah man-o tō neshaste dar vīrānī

‘aysh-i bovad-ān na hadd-e har soltān-i⁽⁵⁵⁾

もしも手が、小麦粉のパンと

一匏の酒、それに羊の腿肉を与えてくれ

それから私とあなたがともに曠野に座すのなら

それはどんな王者にも達しえない愉楽となるだろう

四句とも末尾は “-ānī” と韻を踏んでいる。「手が与える」 dast dādan とは直訳で、「⁵⁶が手に入る」「生ずる」の意味。「小麦粉」 magh-z-e gandom の原義は「小麦の髓」、「愉楽」と訳した原語は「生活」 ‘aysh. 「曠野」 vīrānī の直訳は「荒廃」である。大麦の粗野なパンと対比される「小麦粉のパン」も「羊の腿肉」も優雅で上等の食事を示唆する。そして第四句の帰結節にのみアラビア語起源の単語が三つ (‘aysh, hadd, soltān) 用いられ、純粹なペルシア語の単語のみから構成された第三句までの条件節と好対照をなしている。フィッツジェラルドは、原典のこうした道具立てからパンと酒と友——ここでも「あなた」の性別は指示されて

いない——を選び出し、木蔭でのピクニックの風景を作り出した。「羊の腿肉」を削除したのは、当時のヴィクトリア朝の趣味から見て、それがあまりに即物的で違和感があると思われるからだろう。⁽⁵⁶⁾ その代わり、原典にない「歌の一卷」⁽⁵⁷⁾ a Book of Verse を新たに付け加えている。これは、姉妹篇とも言うべきボドレー写本第四百十九番、

tong-i mey-e la'i khāhām-ō divān-i
sadd-ē ramag-i bāyad-o nešf-ē nān-i
v-āngah man-o tō neshaste dar vīrān-i
khoshar bovad-az namlakat-ē soltān-i⁽⁵⁷⁾

ルビーの色した一壺の酒と一卷の詩集が私は欲しい
命を繋ぐ糧と半切れのパンがあればよい
それから私とあなたが曠野に座せば
それは王者の王国よりも好ましい

を参照し、「一卷の詩集」divān-iのみをここから借用したのであろう。第五百十五番では優雅な食事が列挙されていたのに対し、第四百十九番は質素な糧での満足を語っているの、両者が同一の作者の手になると考えるのは難しい。ちなみに、近現代イランの校訂版のうち、ヘダーヤト版は第四百十九番だけを、フォルギーとガニーの校訂版は百五十五番の異読のみを、それぞれウマル・ハイヤームの作品と判定している。

いずれにせよ、英訳の第四句は「王者にも達しえない愉楽」

「王者の王国よりも好ましい」遠足という意を汲んで、「沙原」Wilderness が「天國」Paradise になる、と和らげて訳している。こうして訳者は、原詩の意味を汲みながら、ヴィクトリア朝社会の美的趣味に合致する形にこれを再創造していったことが判る。アーベリーがいみじくも述べたように、この一編を読んだイギリス・ヴィクトリア朝の紳士淑女は、森への遠足に出かけるさい、「一卷の詩集」つまりフィッツジェラルド訳の『ルバイヤート』を忘れずに携えていったことだろう。

ここで有明の訳詩に戻るなら、『文章世界』へ右の一首が発表された翌月には、『藝苑』に同じ一首を含む合計五首が掲載されている。訳しぶりを窺うため、見本として冒頭の一首をフィッツジェラルドの英訳(第四版第8歌)と併せて掲げよう。

泥沙坡^{ナィシャプル}とよ、巴比崙^{バビロン}よ花の都に住みぬとも、
よしやまた酌^{さく}む杯^{さかずき}は甘^{あま}しとて、將^{まさ}た苦^{くる}しとて、
絶間^{たえま}あらず命^{いのち}の酒^{さけ}はうちしたみ、
命^{いのち}の葉^はもぞ散^ちりゆかむ、一葉^{ひとは}一葉^{ひとは}に。⁽⁵⁸⁾

Whether at Naishāpūr or Babylon

Whether the Cup with sweet or bitter run,

The Wine of Life keeps oozing drop by drop,

The Leaves of Life keeps falling one by one.⁽⁵⁸⁾

英訳は「ニーシャープールであろうとバビロンだろうと、盃に

注がれる酒が甘かろうが苦かろうが、生命の酒は一滴また一滴と滲み出てゆき、生命の葉は一枚また一枚と落ち続ける」という意味の、時のうつろいやすさ、生のはかなさを詠んだ作品である。ウマル・ハイヤームの故郷でもあるニーシャープールは、現在のイラン東部、マシュハドの西に位置するかつての大都市。古代バビロニアの首都バビロンは、現代のバグダードから南に九十キロほど離れた地点に遺蹟が残るのみだが、中世以来のヨーロッパ人にはしばしばバグダードと同一視されてきた。⁽⁶³⁾ 有明は、ニーシャープールには「泥」「沙」を含む沙漠地帯を想起させる前例のない宛て字を用いる一方、バビロンには内田正雄『輿地誌略』や吉田正春『同鑑波斯之旅』⁽⁶⁶⁾などが用いる「巴比倫」を基本にしつつ、「倫」に替えるに、西王母が住まう伝説の山「崑崙」の「崙」を以てし、異国情緒を醸し出す。⁽⁶⁷⁾ 「したむ」は「液を滴らせる」意味の古語。音調はやはり七五と五七を基本とした「七五七五／五七五七／七七五／七五七」の変格なので、流麗というより、むしろ波動のようにゆるやかな動きを感じさせる。この音調に合わせるため、「よ」「ぞ」といった助詞を点綴しているのも特徴である。

ここでもまた、英訳とそのままになったペルシア語原詩とを比べておこう。第四版の第8歌は、第一版には見られず、第二版で初めて登場し、以後は第四版までまったく変化していない。フィッツジェラルドがとりあえず依拠したのは、ボドレー写本の第四十七番と思われる。

命が尽きてゆくのなら、バグダードでもバルフでも同じこと
杯が満たされるなら、甘くても苦くても同じこと

酒を飲め、なぜなら私とお前の亡きあとも、この月は

晦から朔へ、朔から晦へと、いつまでも巡り続けるから

chon 'omr hamī ravad che baghdād-o che balkh

peymāne cho por shavad che shīrīn-o che talkh

mey khor ke pas-az man-o to īn māh basti

az salkh be-ghorre āyad-az ghorre be salkh ⁽⁶⁸⁾

“salkh”は太陰暦の月末(晦)、“ghorre”は同じく月始め(朔)を意味するアラビア語起源の言葉。第一・三・四句が“salkh”で韻を踏む。ただし、「ニーシャープール」への言及はここには見られず、ヘロン・アレックサンダーが推測する通り、フィッツジェラルドは第一版刊行後に披見したニコラ版中の対応する一首に触発され、第二版以降に一首を新たに追加したのだろう。

人生は過ぎゆくのなら、甘くても苦くても同じこと

寿命が尽きるのなら、ニーシャープールでもバルフでも同

じこと

酒を飲め、なぜなら私とお前の亡きあとも、月は

晦から朔へ、朔から晦へと、いつまでも巡り続けるから

chon mī-godharad 'omr che shīrīn-o che talkh

chon jān be-lab-āmad che neshāpūr-o che balkh

mey nūsh ke ba'd-az man-o tō māh basti

az salkh be-ghorre āyad-az ghorre be salkh⁽⁸⁾

「寿命が尽きる」と訳した原語「魂が唇に達する」*jān be lab āmadan* は、死が近づくことの定型表現である。英訳者はこれらの二首の前半二句を利用し、「*che... che...*」(「であれ...であれ」)という譲歩構文をそのまま「*Whether... or...*」という英語の定型句に置き換えている。現アフガニスタン北部の町「バルフ」*balh*の名は、原詩では脚韻語として不可欠だったのに対し、英訳ではむしろ「*run*」「*one*」と韻を踏む必要上、ボドレー写本にあった「バグダード」の同義語である「*Babylon*」が選ばれたのに違いない。ただし、*/rân/ wân/* に対して */æbælan/* では不完全な押韻である。

一方、フィッツジェラルド訳の後半二句については、まず、「生命の酒が一滴また一滴と滲み出てゆく」という発想の句として、ニコラ版の第十八番の後半二句が指摘されている。

われらが酌人の手は酒瓶の首を掴み

酒の魂は酒杯の縁から滴り落ちる

ham sāqi-ye mā halq-e sorāh dar dast

ham bar lab-e sāghar-āmadē jān-e sharāb⁽⁹⁾

「縁」と訳した原語「*lab*」には「唇」の意味もあり、右に記したように「魂が唇に達する」*jān be lab āmadan* は「死ぬ」の婉曲表現でもあるので、酌人(*sāqi*)が酒瓶の喉を締めれば「酒の魂が

唇に達する」つまり「死ぬ」という意味と、酌人が酒瓶を掴んで酒を注げば、「酒の魂が酒杯の縁に達する」すなわち酒が溢れて杯の縁からこぼれるという意味とをにかけていることになる。

また、「生命の葉が一枚また一枚と落ち続ける」の発想源としては、やはりニコラ版の第二百六十六番の前半二句が挙げられる。

私が運命から逃れて

葉のように生命の枝から散ってゆく瞬間

ān lahze ke az ājal gorizān gardam

chon barg ze shākh-e 'omr rīzān gardam⁽¹⁰⁾

ニコラの注によれば、「運命から逃れる」とは、「現世から来世へ移動する」、すなわち「死ぬ」意味だという。このようにフィッツジェラルドは、いくつかの原詩を組み合わせて一首を組み立てる場合も少なくなかった。ヘロン・アレンは、全百一首のうち、ボドレー写本ないしカルカッタ写本の原詩と対応するのは四十九首、複数の原詩の組み合わせは四十四首と数えている。⁽¹¹⁾

五 石澤氷湖の全訳

有明の訳詩が雑誌に掲載された一九〇七年から翌〇八年にかけて、日本語による初めての全訳が二種類発表されている。訳者は石澤氷湖(本名は久五郎^{きゅうごろう})。一八七〇—一九三八年)と大住嘯風

(本名は舜岳。別号は舜。一八八一—一九二三年)である。

石澤は福島県保原町(はばらまち)(現在の伊達市保原町)出身の経済学者。⁽⁷³⁾ 菱沼徳三郎として出生するが、間もなく母方の伯父で同町の素封家・石澤久作(第二代久五郎)の養子となつて(第三代)久五郎と改名。私塾・菊田塾での勉学や家業(生糸売買)の手伝いを経て、一八九七年三月、東京専門學校(のちの早稲田大學)邦語政治科二年に編入学、翌年七月卒業後、同研究科に進学、一九〇〇年十月に東京高等法學院(のちの中央大學)高等科法學科を卒業した。一八九九年九月に眞宗本願寺から開教師としてサンフランシスコに派遣された西島覺了を補佐するため、一九〇〇年十一月に渡米。⁽⁷⁶⁾ 一九〇六年九月まで家僕として厨房で働き学費を稼ぐなかで、一九〇四年六月にアイオワ大學、一九〇七年六月にウィスコンシン大學でそれぞれ修士号取得、さらに奨学金を得て、一九〇九年六月にはマサチューセッツ州ウスターのクラーク大學で博士号を取得している。⁽⁷⁸⁾ 同年十月、福島縣から海外産業視察員を委嘱され、「主として絹織物業の状況を視察する」⁽⁷⁹⁾ 目的で、翌年十一月、ニューヨークよりイギリス、フランス、スイス、イタリア、ロシアを巡回、満洲を経て一九一〇年七月帰国。⁽⁸⁰⁾ 一九一二年九月、京都同志社講師として明治産業史論を講じる。⁽⁸¹⁾ 一九一三年七月から翌年八月まで山陰日日新聞社主筆、八月に東京に戻った後、一九一六年十月に東京銀行集會所(現在の全国銀行協会)に入所、一九三四年三月の停年退職まで月刊『銀行通信録』の編輯などに従事した。主な著訳書として、以下が挙げられる。

- ・エリー、ウキツクワ―共著／石澤久五郎譯述『經濟學提要』實業之日本社、一九〇九年一月。⁽⁸²⁾
- ・『産業視察報告 第五篇(羽二重業)』福島縣、一九一一年三月。⁽⁸³⁾
- ・フラートン著／石澤久五郎譯補『列強權力問題』大日本文明協會、一九一五年一月。⁽⁸⁴⁾
- ・石澤久五郎譯補『ガリ經濟原論』前篇、敬文堂書店・東山堂書房・世界堂書店、一九一六年九月。⁽⁸⁵⁾
- ・石澤久五郎『本邦銀行發達史』同文館、一九二〇年十月。⁽⁸⁶⁾
- ・井上辰九郎監修／東京銀行集會所譯『準備銀行と金融市場』東京銀行集會所、一九二九年二月。⁽⁸⁷⁾
- ・石澤久五郎『金融市場』市場經濟講座第六卷、春秋社内・經濟知識普及會、一九三四年三月。

渡米期間中、石澤はサンフランシスコの桑港佛教青年會(のち米國佛教青年會、米國佛教會)が刊行する機関誌『米國佛教』の最も熱心な寄稿者の一人であった。とくに同誌の第三年一號(一九〇二年一月)から第四年九號(一九〇三年九月)まで、ミューラー Max Müller (一八三三—一九〇〇年)の英訳に基づく「英文法句經」和訳を十七回、続いて第六年二號(一九〇五年二月)から第八年四號(一九〇七年四月)まで、今度はエドマंडス Albert J. Edmunds (一八五七—一九四一年)の英訳⁽⁸⁸⁾による和訳を十五回に亘り掲載している。佛説を要約したパリー語の道德的教訓詩「法句經」⁽⁸⁹⁾は、

当時はまだ原典訳も出されてはいなかった。

この連載終了後、同誌の第八年十號（一九〇七年十月）から第九年九號（一九〇八年九月）まで、九回に亘って「文苑」欄に連載されたのが氷湖生譯「オーマア、ケーヤームの四行詩」である。底本の記載はないが、フィッツジェラルド訳第四版であろう。さらにこのあと、第十年一・三號（一九〇九年一・三月）に、「オーマア、ケーヤーム（一）」「オーマー、ケーヤーム（二）」と題してウマルの小伝を寄稿⁽⁹³⁾、また、帰国後の一九一二年には、高島米峰（一八七五—一九四九年）を中心とする佛教清徒同志會（のち新佛教徒同志會）の機関誌『新佛教』に、ウマル伝とフィッツジェラルド訳からの邦訳の改訂版を三回に分けて発表している⁽⁹⁴⁾。同誌は帰国後の彼の主要な文筆活動の場の一つでもあった。

政治・経済・社会の多方面に亘る論説や活動と同時に、新体詩や短歌も折に触れて寄稿しているところを見ると、石澤は文藝のたしなみが豊かな人物であったように思われる⁽⁹⁵⁾。『ルバイヤート』翻訳を思い立った動機について直接は何も語っていないが、やはり同じ雑誌に寄せたエッセイで、「オーマアは東洋の詩人なり、其の詩悲哀の調を帯ぶること甚だし⁽⁹⁶⁾」、「吾等は此の悲哀の調にきゝて人生をさとり、久遠の光明を求めざるべからず」、「道を求めて道に入るべし⁽⁹⁷⁾」と記しているので、『ルバイヤート』全体に通底する佛教的無常感と生き方の教えに共鳴したのであろう。

訳しぶりを窺うために、蒲原有明が選んだのと同じ作品（第12歌・第8歌）を取り上げてみよう。

絞首架のさびしき下に 歌の一巻⁽⁹⁸⁾
酒の一壺⁽⁹⁹⁾ パンの一塊⁽¹⁰⁰⁾ — かくても汝⁽¹⁰¹⁾
わが傍にあり 荒野の中に歌ひつゝ—
あゝ 荒野こそ實に吾等の樂園なれ⁽¹⁰²⁾。

「五七七／七七七／七七五／七七六」と七音を基本とし、原詩の単語をほぼそのまま日本語に置き換えたおとなしい訳である。「the Bough」を「枝」ではなく「絞首架」と訳したのには読者はぎよつとさせられるが、『新佛教』掲載のさいには「木かげさびしく繁れる下に」と修正している。

ナイシヤバアールにありてもバビロンにありても
ふるゝ聖杯の甘きにもせよ苦きにもせよ
生命の酒はしたゝりしたゝり漏れて止むなく
生命の綠葉⁽¹⁰³⁾一葉一葉に落ちて止むなし⁽¹⁰⁴⁾

第一句の「八四五四」という読みにくい音調を別とすれば、あとは八音と七音の交代である。素直な訳しぶりのなかで、「the Cup」にキリスト教やヨーロッパ中世の聖杯伝説を想起させる「聖杯」の訳語を宛てたのは問題があるが、これも『新佛教』では「唇に觸るる盃⁽¹⁰⁵⁾」と訳し直している。

石澤訳は、読者層の限定された特殊な性格の雑誌上とはいえ、初めてフィッツジェラルド訳の全貌とウマル・ハイヤームの生

涯を伝えようとした点では歴史的な重要性を持っている。ただ、古語や雅語を多く含み、脚韻の要請で散文とは異なる特殊な構文を取ることも少なくないフィッツジェラルド訳を、おそらくは何の注釈書もなく読解するのは、英文学の専門家でもない訳者にとつては骨の折れる作業であつたに違いない。そのため、現代の眼で眺めると、石澤訳にはさまざまな問題点が含まれていることも事実である。

例えば、右の「絞首架」や「聖杯」に類する単語や連語・熟語の水準での誤解に始まり、人称代名詞の取り違い、構文の不適切な解釈など、指摘すべき点は枚挙に遑がない。一首全体を通して解釈上の誤解が見られる例として、第42歌を挙げておこう。

あゝ 酒飲ま^る 盃にふる^る唇

始りも終りもあらず⁽¹²⁾ 始めこそ凡ての終り――

思へ今日汝あるを^{なれ} 昨日は如何に

汝のありしか^{なれ} 明日は如何に汝のあるらん⁽¹³⁾。

And if the Wine you drink, the Lip you press,

End in what All begins and ends in — Yes;

Think then you are To-day what Yesterday

You were — To-morrow you shall not be less.⁽¹⁴⁾

「お前が飲む酒、お前が触れる唇が、結局は万物の始まりでもあり終わりでもある無に帰するのなら、今日のお前は昨日のお前(のごとく無)であり、明日のお前もやはり同様(に無)である

ことを思え」というのが一首の意味である。“what All begins and end in”はこれだけでは判りにくい表現だが、初版で“the Nothing all Things end in”となつている点を勘案すれば、「無」を意味していると解釈できる。石澤は、こうした理解の鍵が与えられていなかったこともあつて、第二句をまったく異なる意味に訳している。原詩第三句目の“what”は関係代名詞で“you are”の補語だが、石澤はこれを“think”の目的語と取つて全体の構文を誤解したため、「如何に(中略)ありしか」「如何に(中略)あるらん」という間接疑問文になつてしまった。

逆に、解釈に無理がなく、出来栄えも穏当な見本としては、第24歌と第67歌を挙げることができる。

なほ世にあらば汝が世を送れ思ひのまゝに

四大のちりと化せざるさきに

塵埃^{ちり}より塵埃に、ちりの下にぞさびしく眠る⁽¹⁵⁾

酒なく歌なく舞姫^{まひこ}なく あゝはてもなくして

Ah, make the most of what we yet may spend,

Before we too into the Dust descend;

Dust into Dust, and under Dust, to lie,

Sans Wine, sans Song, sans Singer, and — sans End!⁽¹⁶⁾

天津國 願望^{のぞみ}満ちたるまぼろしか、

夜見の國 ほのほに燃ゆるみたまより

暗黒^{やみ}にうつれる影なるか、

やみゆ離れし今日の吾やがてや闇黒にかへるらん⁽¹⁰⁾

Heav'n but the Vision of fulfill'd Desire,

And Hell the Shadow from a Soul on fire

Cast on the Darkness into which Ourselves,

So late emerg'd from, shall so soon expire.⁽¹¹⁾

前者は地水火風を意味する佛教用語「四大」⁽¹²⁾を加えることで無常感を強調し、後者は『日本書紀』や『萬葉集』に登場する神話上の「天津國」「夜見の國」を天国・地獄に代えて用い、日本人読者に親しみやすい形を作り出している。

六 大住嘯風の全訳

他方、社会思想家・大住嘯風の全訳は、石澤の連載が始まった四か月後の一九〇八年二月から四月にかけて『新佛教』誌に発表され、のちに著書『自然より人生へ』(星文館、一九一三年六月)や『實生活と思想』(春湖書院、一九二二年三月)にも収録された。⁽¹³⁾嘯風の略歴は『あみ・ど・ぱり』誌によると、

明治十三年四月二日東京浅草北清島町五十三龍淵寺に生る、下谷高等小學校を卒業後下谷眞宗宗學校に入學修了後獨乙神學校等に學び、語學等を修めた。』學歴は以上で後は全部獨學の由。

宗教雜誌等に寄稿し、『新佛教』同人となる、明治四十三年

京都中外日報社に編輯長として入社、同年辭して直ちに萬朝報社に入社、爾來大正十一年まで在社、その間東洋大學講師にもなる。

大正八年十月廿八日朝報特派記者、及び宗教研究の名目で渡佛。

大正十二年十一月十三日巴里にて客死、享年四十二歲(後略)。⁽¹⁴⁾

下谷小學校ではのちの洋画家・石井柏亭(本名は滿吉。一八八二—一九五八年)と同窓だった。⁽¹⁵⁾また、著名な評論家となる千葉龜雄(一八七八—一九三五年)とは一緒に「神田の某英語學校に通」い、「机を並べてエービシーを習った」仲だという。彼の訳詩の『新佛教』掲載時期は、石澤の『米國佛教』への訳詩連載時期と一部重なっており、連載開始(一九〇七年十月)こそ石澤の方が早い。嘯風訳発表後もまだその連載は続いていた。前述のように、石澤もまたのちに『新佛教』へ改訂版を発表するが、滯米中に同誌に掲載された嘯風訳はおそらく見ていなかっただろう。⁽¹⁶⁾

訳詩冒頭の「オーマル、カイヤム(Omar Khayyām)」に関する簡単な紹介では、「ルバイヤット」はカイヤムが一代の名篇にして、激越の調放縱の想、固淡の論議を排するに戀愛の高潮を以てし、置酒高會の歌のうちに必死の宿命遂に避くべからざるを諷詠したるものとす」と述べたのち、「幽韻縹渺として來生を歎き、今生を楽しむさま、恰かも是歡樂の盃に悲愁の酒を盛り、

其渣滓^(さし)をたも餘さざるに似たらずや^(ママ)」と、詩人の生き方を讃美する。フィッツジェラルドによったとある百一首の訳の底本は、第四版であろう⁽¹⁷⁾。有明訳や石澤訳と比較できるよう、まずは同じ第12歌と第8歌の訳しぶりを窺ってみることにしたい。

樹の下に詩歌の書、酒の甕^(もと うた ふみ)
食ふべき糧の裏と一歌の主^(かて つみ)

鳴くは荒野の調こそ、

げに、うまし、淨樂にみつ國めかし⁽¹⁸⁾。

これは嘯風訳のなかでは出来のよい部類に属する。「五五五／五七五／七五／五七五」と五音と七音を織り交ぜた、素直な訳である。「甕^(みか)」の訓みは「祝詞^(のりと)」(九二七年撰進『延喜式』卷八)などに溯る言葉、「めかし」はやはり古語で「…のように見える」の意味。ただ、第二句から第三句にかけて、「あなたが曠野のなか、私の傍らで歌っていれ⁽¹⁹⁾」 and Thou / Beside me singing in the Wilderness とあるところを、友人ではなく小鳥への呼びかけと受け取ったためか、「鳴く」という訳語を宛てている点は問題であらう。

ハビロンか、ナイシヤプールか、盃は、
味よきも、苦きも、いづれ走り去る、
滴々と『生命の酒』の泌み入ると^(ママ)
『生命の葉』毎、落ち行くを護れよし⁽¹⁹⁾。

こちら音調は「五七五／五七五／五七五／七五五」と規則的である。末尾の「護れよし^(まも)」はおそらく誤植で、単行本の「護れかし^(まも)」が正しいであろう。「盃は、味よきも、苦きも、いづれ走り去る」は、原文第二句“Whether the Cup with sweet or bitter run” (盃に甘い酒と苦い酒のいずれが注がれようと)の誤訳。“run”は「液体を」注ぐ」という意味の他動詞の過去分詞だが、嘯風はこれを「走る」という自動詞と解釈したらしい。その結果、日本語として意味不明の文になってしまっている。後半二句もまた、原文“The Wine of Life keeps oozing drop by drop, / The Leaves of Life keep falling one by one” (生命の酒は一滴また一滴と滲み出てゆき、生命の葉は一枚また一枚と落ち続ける)という平叙文が祈願文に変化しているのみならず、日本語としても、「泌み入る^(しみ)」ことと「落ち行く^(おち)」こととを「護れ^(まも)」とはどういう意味なのか、誰に對する命令なのか、「泌み入る^(しみ)」とはどこへ滲み入るのかなど、曖昧さが残る。

嘯風訳の全体的な特徴としては、右にもその一端が窺われるように、例えば「やらふ」 thrust, forlorn, loss'd, consume (放つ。第26・33・70・77歌)、「ひぢ」 Earth, Dust, Earth, Clay (泥。第53・62・73・84・89・90歌)、「かゝなべ」 「かゝなべ」 reckoning (日数を重ねて。第57・62歌)などの古語・雅語⁽¹²⁾、「阿蘭若^(あらんじやく)」 Temple (閑静な土地に作られた庵。第2・77歌)、「己身法爾^(こしんぽふに)」 I Myself (自己自身の本来あるがままの姿。第66歌)といった佛教語が多用される点を挙げられる。しかし、これらがかえって訳の難解さを助長して

いることも否めない。また、「釋義をも求むるを爲さず、唯詩句を追ふて之を譯し」たと序文に記されている通り、訳者自身が意味を理解できないまま、ただ字面だけを日本語に置き換えたため、意味不明の訳文がきわめて多いのも特徴である。その理由としては、「イラム」Iran（第5歌）、「ペレービ」Pellevi（第6歌）、「フェルラシ」Ferrash（第45歌）、「酒神」Saki（第46・101歌）、「アリフ」Alif（第50歌）のようにペルシア語由来の単語の意味自体を訳者が理解しえない場合と、英語の単語や構文を把握できていない場合とが見受けられる。後者の例として、第18歌を掲げておこう。

光榮あるジャムシドが御防士

獅子、蜥蜴、宮居は守れ、酔ひしれて

眠りぬーバーラヌか「痴漢」と

頭に印象おすも覺らざる。

They say the Lion and the Lizard keep

The Courts where Jamshyd gloried and drank deep;

And Bahrām, that great Hunter — the Wild Ass

Stamps o'er his Head, but cannot break his Sleep.

単行本では「御防士」のルビは「御防士」に、「バーラヌか「痴漢」は「バーラムが『痴漢』にと、誤植が訂正されている。フイツジェラルド訳にも簡単な注記がある通り、ジャムシドはペルシアの神話上の王、バフラームはササン朝の第十五代帝

王バフラーム五世（四二〇—三八年在位）のこと。「聞くところでは、かつてジャムシドが榮華を誇り深く酔いしれた宮廷を獅子や蜥蜴が守り、偉大な狩人であったバフラーム王は、野生の驢馬がその頭を踏みつけても眠りを破ることはできない」というのが一首の意味である。ところが嘯風は、動詞過去形「誇った」gloriedを直前の「Jamshyd」にかかる形容詞と解釈して「光榮あるジャムシド」、動詞現在形「守る」keepを命令形「守れ」「野生の驢馬」Wild Assを「痴漢」、自動詞「踏みつける」Stampsを他動詞「押印する」と取って「印象おす」と訳し、しかもその主語を「野生の驢馬」ではなくバフラームと誤解している。また、「酔ひしれて／眠り」「覺らざる」のは誰なのかも判然としない。末尾が「ざる」と連体形で終わっているのも奇異である。これでは読者は一首の意味を読み取ることもできなかったに違いない。

七 蠣瀬彦藏の『おまあかいやむ 四行歌 百句』

石澤訳・嘯風訳発表から二年後の一九一〇年九月には、蠣瀬彦藏（一八七四—一九四四年）による『おまあかいやむ四行歌 百句』が私家版としてボストンで刊行されている。蠣瀬は大分県中津出身、一九〇一年東京帝國大學哲學科卒業、一九〇二—〇六年、元良勇次郎（一八五八—一九二二年）の心理学・倫理学・論理学第一講座助手、一九〇六年夏から一一年にかけてマサ

チューセツ州ウースターのクラーク大学でサンフォード Edmund Clark Sanford (一八五九—一九二四年) およびホール Granville Stanley Hall (一八四六—一九二四年) に師事、修士および博士号を取得した心理学者である。⁽⁹⁾ 日本の心理学史では、フロイト Sigmund Freud (一八五六—一九三九年) の精神分析の最初の紹介者として知られている。⁽¹⁰⁾ しかし帰国後は、東京高等師範学校講師を経て専門分野を離れ、文部省圖書監修官、文部省嘱託を歴任した。クラーク大学への留学時期は石澤(一九〇七—一九〇九年)と重なっているので、専門は異なるもののお互いに面識があった可能性はあるだろう。ただ、『ルバイヤート』邦訳について話しかつたことがあるのかどうかはわからない。

蠣瀬は、ウースターの『ルバイヤート』蒐集家コース E. L. Coe からの依頼で翻訳に着手、学位論文執筆後、帰国までの余暇を利用してこれを一月で完成させた。コースは「製圖用のペンでインデアン・インキで書いた稿本」を「寫眞凸版印刷に附し」、限定百部を蠣瀬と折半したという。⁽¹¹⁾ 底本にはフィッツジェラルド訳の第五版を用い⁽¹²⁾ つも、第二版から二編を補い、第五版から二編を削除、第五版のうち四編はホワインフィールド訳と取り替えて、合計で百首となるよう工夫している。⁽¹³⁾ 「緒言」に「此種の翻譯に最も適する我所謂新體詩に模して之を譯す」とあるように、すべての歌が七五調四行四十八音から成り、仮名表記されている。ここでもまた、見本として第12歌と第8歌、それに第18歌を引いてみよう。

こずゑの	したに	うたのまき							
さけの	とくり	に	ばんのき						
れ	そして	なんぢ	が	うたひ	な	ば			
ひと	なき	さ	とも	じやう	ど	なり			
「ない	しや	ぷう	る」	に	「ば	びろん」			
あま	きに	に	が	き	に	かま	ひ	なく	
いの	ちの	さ	け	は	な	が	れ	ゆ	く
し	づく	し	づく	に	た	え	ま	なく	
かの	「じ	やむ	しど」	の	き	ゆう	で	ん	は
し、	や	と	か	け	の	ね	ぐ	ら	なり
かの	かり	び	との	「ば	あら	む」	は		
いま	は	の	う	ま	に	ふ	ま	る	なり

第12歌は原詩のほぼ過不足ない和訳であるのに対し、第8歌の方は、原詩の第四句「生命の葉は一枚また一枚と落ち続ける」⁽¹⁴⁾ The Leaves of Life keep falling one by one に対応する訳が脱け落ちてしまっている。また第18歌は、全体の意味は正確に把握されているものの、「榮華を誇り深く酔いしれた」⁽¹⁵⁾ gloried and drank deep, 「眠りを破ることはできな」⁽¹⁶⁾ cannot break his Sleep の部分が反映されておらず、末尾は本来「ふまるるなり」と、受身の助動詞「る」の連体形「るる」が必要なところを、音数の制約で終止形を用いているため、日本語表現として舌足らずの印象を

与える。

これら数例からも見て取れるように、蠣瀬訳は全体に、英語原詩の解釈においては石澤訳や嘯風訳より遙かに正確である半面、七五音四行という枠組みを厳格に遵守した結果、プロクルステスの寝台よろしく、原詩に対応する訳語がこの音数の枠内に収まり切らない場合は、これをばつさり切り捨ててゆく点に特徴がある。また、音数の制約も絡んで、古典文法に合わない箇所や拙い表現、奇異な表現が散見されるのも問題であろう。「予嘗て詩作の経験なく身海外にありて圖書の参照に用ゆべきなく又師友の校閲を仰ぐべきなく従て此の稿や頗る不完全」という「緒言」の言葉も、あなたがち謙遜の辞とのみは受け取れない。いずれにせよ、海外で出版された部数限定の私家版という性質もあって、一部の好事家を除き、この訳詩集に接した日本人はごくわずかにすぎなかったように思われる。

こうして明治期の邦訳を概観してみると、有明訳を別として、石澤・大住・蠣瀬のいずれの訳も、佛教関係の雑誌へ発表されたり、特殊な私家版であつたりしたため、『ルバイヤート』の全貌を一般読者に伝える上ではあまり貢献できなかったと言わざるをえない。ただ、石澤と大住が佛教という共通項を持っていたのは、この詩集に通底する思想が佛教の無常感を通して受容される傾向にあつたことの証拠となりえよう。また、石澤と蠣瀬がクラーク大学で繋がっていたのも興味深いが、これは北米における『ルバイヤート』熱の間接的な余波と見做しうるだろう。

う。

蠣瀬訳刊行の一年前の一九〇九年、『時事新報』は「内外百書選定」と題して「各方面の先進に、廣く國民の趣味と智識を涵養するに足るべき良書二十種以上づゝの指定を乞ひ」、高得点の百冊を集めて読書界に推薦するという企画を行なつた。このアンケートにおいては、詩人の野口米次郎（一八七五—一九四七年）が「Edward Fitz Gerald's Omar Khayyam」を、薄田泣菫が「オーマカイヤム詩集」を、そして第一高等學校教授の畔柳都太郎（一八七二—一九三三年）が「Rubaiyat, Omar Khayyam」を挙げ、英語でこの詩集に親しむ知識人が増えつつあることを示していた。『ルバイヤート』自体は「百書選」中には含まれなかったものの、この結果全体に「選擇の宜しきを得たりと云ふ能はず」と異議を唱えた内田魯庵は、『學鐙』誌上で独自に「現代人の書齋の堅としての名什五十部」を選び、その第三十一番目に「Fitzgerald — Rubaiyat of Omar Khayyam」を加えている。

また、一九一〇年一月には木下杢太郎（本名は太田正雄。一八八五—一九四五年）が戯曲「醫師ドオバンの首」のなかで、詩人が國王のために歌う「新しい眞理の歌」として、フィッツジェラルド訳『ルバイヤート』の第55歌を独自に意識して挿入していることも忘れられない。

婚禮の前の夜に、己は汝に云つたのではないか。

己は汝で今度二度目の妻をもつ。

あの石女の『理性』をば己はそれ故追ふたのぢや。

美しい汝ぢやもの美しい酒の娘の汝ぢやもの。

(OMAR KHAYYAM)⁽¹⁵⁾

You know, my Friends, with what a brave Carouse

I made a Second Marriage in my house;

Divorced old barren Reason from my Bed,

And took the Daughter of the Vine to Spouse.⁽²⁾

「友よ、君らは知っているだろう、私が華やかな大宴会を催して第二の妻を家に迎え、不妊の理性を寢床から離縁して、葡萄の娘を娶ったことを」というのが原詩の意味だが、李太郎はその大意を汲んで五音と七音を基本とする新たな作品に練り直していることが判るだろう。

このあと、英文学の専門家による、より信頼に足るフィッツジェラルドの全訳やペルシア語原文からの邦訳が現われるためには、大正時代の到来を待たねばならなかった。

[注]

* 本文における引用文中、引用者の注記・説明を示す丸括弧は小字（一ポ下げ）とし、原文自体の丸括弧は並字で表示する。また、引用文中の引用者によるルビには丸括弧を付し、原ルビと区別した。ブラケット「」は引用者による補足である。

(1) ペルシア語の現代音では「オマル・ハイヤム」「Omar Khayyam. 実際には、発音のさいに二語のあいだに限定・被限定また

は修飾・被修飾関係を示す指標（現代音で「エザーフェ」edafe, 古典音で「イダーファ」idafaと呼ばれる）の *wa* を入れるので、古典音 'Umar-i-Khayyām, 現代音 'Omar-e-Khayyām となるが、本稿では人名について（書物の標題に含まれる場合を除き）、ローマ字転写・仮名表記の上ではエザーフェを考慮しない。英語圏では「オーマー・カイヤム」「Omar Khayyam ないしは「オームー・カイヤム」「Omar Khayyām と発音される場合が多い。

(2) 単数形は古典音で「ルバーイー」rubā'ī (現代音では「ロバリー」robā'ī)。書名になつてゐる複数形は古典音で「ルバィーヤート」rubā'iyāt (現代音では「ロバィーヤート」と表記する。なお、一般にペルシア語では末尾の二重子音記号 (tashdid) は省略されるので、*yā* の文字の上の二重子音記号を外して「ルバィーヤート」rubā'iyāt (現代音では「ロバィーヤート」robā'iyāt) とする) とも可能である。

(3) 以下、本節の記述は主として次の文献による。

- Edward Fitzgerald, *Rubā'iyāt of Omar Khayyām: A Critical Edition*, Edited by Christopher Decker, Charlottesville and London: University Press of Virginia, 1997, pp. xii-xlviii, "Introduction." 本書は以下 Decker の略記。
- Edward Fitzgerald, *Rubā'iyāt of Omar Khayyām*, Edited by Daniel Karlin, Oxford: Oxford University Press, 2009, pp. xi-xlviii, "Introduction." pp. xlix-lvi, "Publication History." 本書は以下 Daniel Karlin の略記。
- *The Ruba'iyat of Omar Khayyām, Being a Facsimile of the Manuscript in the Bodleian Library at Oxford, with a Transcript into Modern Persian Characters*, Translated, with an Introduction and Notes, and a Bibliography, by Edward Heron-Allen, London: H. S. Nichols, 1898, pp. i-xlii, "Introduction." 本書は以下 Heron-Allen 1898 の略記。

また、本節については筆者の一般向けの旧稿「英文学の世界に」(オマル・ハイヤーム著、エドワード・フィッツジェラルド英訳、竹友藻風邦訳『ルバイヤート——中世ペルシアで生まれた四行詩集』マール社、二〇〇五年十一月、一一五—一八頁)を、必要な修正と注記を加えつつ利用した。

- (4) *Les Quatrains de Khayyām*, traduits du Persan par J. B. Nicolas, Paris: L'Imprimerie Impériale, 1867. ただし、ニコラ版自体には底本の記載がなく。Heron-Allen 1898, p. xxxviii による。
- (5) *The Quatrains of Omar Khayyām, the Persian Text with an English Verse Translation*, by E. H. Whinfield, London: Trübner & Co., 1883.
- (6) ホドレー写本の校訂版。書誌情報は注(3)で既出。
- (7) Sādeq Hedāyat, *Tarāne-hā-ye Khayyām*, Tehran: Amir-e Kabir, 1934.
- (8) *Robā'iyāt-e Hākīm 'Omar-e Khayyām-e Nishāpūrī*, bā Moqaddame o Havāshī be Ehtemām-e Moḥammad 'Alī Forūghī, Doktor Qāsem Ghanī, Tehran: Ketāb-e Farzān, 1983.
- (9) ウマル・ハイヤームと『ルバイヤート』に関する現代の評価については、黒柳恒男『ペルシアの詩人たち』(オリエント選書2、東京新聞出版局、一九八〇年六月)の一〇五—一三五頁「ルバイヤート詩人」オマル・ハイヤーム」の章に詳しい。
- (10) 詩編相互の繋がりには、接続詞や代名詞、句読点などによって示されている。以下はその例である(歌の番号は第四版による)。
 - ・ 接続詞——And (第3・6・15・20・23・38・39・42・46・58・72・77・95歌) For (第22・37歌) So (第43・90歌) That (第92歌)。
 - ・ 副詞——Then (第34・35・40歌) Whereat (第87歌)。
 - ・ 代名詞、関係代名詞——them (第10・28・84歌) her (第101歌)。
 - ・ 45歌) Whose (第51歌) another (第88歌) her (第101歌)。
 - ・ 句読点——コロンの(第59・66歌末尾) セミコロンの(第51・68歌末尾)、句読点なし(第75歌末尾。第76歌と構文上繋がる)。

また、第35歌—38歌、第82歌—90歌は陶器や土器の壺を主題にしている点でも連続しており、後者には第一版で「酒壺の書」*Kūza-Nāna* の総題が与えられ、第二版以降は前後に挿入された黒星(★)五つから成る行によって他と区別されている。

- (11) *The Letters of Edward FitzGerald*, Edited by Alfred McKinley Terhune and Annabelle Burdick Terhune, 4 vols., Princeton: Princeton University Press, 1980, Vol. 3 (1867–1876), p. 60: To E. B. Cowell, November 1867. 強調は原文。本書は以下 *Letters* 1980 と略記。
- (12) *Letters* 1980, Vol. 3, p. 339: To Bernard Quaritch, March 31, 1872.
- (13) サイ・ジモン・ラボック著／幸福散史 澁江保譯『増補幸福要訣』博文館、一八九三年八月。
- (14) 同右、一二五頁。原文は総ルビ。対応する原文は、*The Pleasures of Life*, by Sir John Lubbock, New York: D. Appleton and Company, 1887, p. 80: Many, I know, will think I ought to have included Omar Khayyām.
- (15) 例えば、本田信教譯『人生の快樂』(金港堂、一九〇二年六月)の八〇頁では、「オーマーキヤムの著をも此中に入れざるべからざるべし」、吉田潔譯註『プレジャーズ・オヴ・ライフ講義』(金刺芳流堂、一九一八年九月)の一三二頁では「私は知る衆多の人々はオーマー・カイアムをも此中に入る可き筈だと思ふであらう」と訳されている。
- (16) 姉崎政治「最近の波斯文學」『太陽』第二卷四號、一八九六年二月、一一〇—一五頁。
- (17) Alexander von Kégl, “Zur Geschichte der persischen Literatur des 19. Jahrhunderts,” *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 47, 1893, pp. 130–42.
- (18) 姉崎政治「最近の波斯文學」一一二頁。傍点は原文。雑誌全体に句点はなく、読点のみ使用。対応する原文は p. 134: Wie fast alle modernen Dichter Irāns, so liebiget zuweilen auch Kā'āni mit dem seit 'Omer Hefjān's Zeiten Mode gewordenen Cynismus und

rhmt die Trunkenheit und den Wein (イランのほとんどの現代詩人と同様、カーアーニーもまた、オマル・ハイヤームの時代以来流行となった冷笑主義にしばしば色目を使い、酩酊と酒を称讃する)。

- (19) 善松筆記「樓上雑話」『學鐙』第七年一號、一九〇三年一月、二〇頁。のち、『内田魯庵全集』第五卷(隨筆・評論一)、『野村喬編』ゆまに書房、一九八四年九月、三〇五頁。

- (20) Edward Heron-Allen, *Some Sidights upon Edward Fitzgerald's Poem "The Ruba'iyat of Omar Khayyām": Being the Substance of a Lecture Delivered at the Grosvenor Crescent Club and Women's Institute on the 22nd March 1898*, London: H. S. Nichols, Ltd., 1898, p. 10.

- (21) Lafcadio Hearn, *Interpretations of Literature*, Selected and Edited with an Introduction by John Erskine, 2 vols, Vol. 1, New York: Dodd, Mead and Company, 1917, pp. 304-20, "Chapter XXI Edward Fitzgerald and the Rubaiyat." 目次では、章題は「Edward Fitzgerald and the "Rubaiyat"」と Rubaiyat に二重引用符が付されている。最初の邦訳は、田部隆次譯「エドワード・フィッツジェラルドと『ルバイヤット』」(『小泉八雲全集』第十五卷(詩論續)、『第一書房』一九二七年八月、五二二―四〇頁)である。

- (22) 『小泉八雲全集』第十五卷、六三七頁、田部隆次の後記。
- (23) 原文 p. 318 に "A variorum edition of the poems has just been published this year" (田部譯、五三八頁「今年」の詩の諸註版が丁度出版された)とあり、この "variorum edition" が書名であるとすると、一九〇二年刊行の次の七冊本を指すと思われる。

• *The Variorum and Definitive Edition of the Poetical and Prose Writings of Edward Fitzgerald, Including a Complete Bibliography and Interesting Personal and Literary Notes, The Whole Collected and Arranged by George Benham with a Preface by Edmund Gosse*, New York: Doubleday, Page & Company, 1902.

次に示すポッターの書誌によれば、一九〇三年までの段階で書名に "variorum edition" を含むのはこの書物のみである。

- *A Bibliography of the Rubaiyāt of Omar Khayyām, Together with Kindred Matter in Prose and Verse Pertaining Thereto*, Collected and Arranged by Ambrose George Potter, London: Ingpen and Grant, 1929, p. 99, no. 306.

- (24) 引用された詩は、その表記(単語冒頭の大文字・小文字の相違、小頭文字(スモール・キャピタル)や斜体、ハイフン、ダッシュ、省略記号(アポストロフィ)の使用の有無、句読点の有無およびその種類の相違、語順の相違、各詩の三行目の字下げの有無など)においていずれの版とも対応しない場合が多いが、これは編輯のさいの不備であろう。「全部で百一首」(原文 p. 318, 田部訳五三八頁)とあるので底本は第三版ないし第四版であるが、さらに第28番の詩(原文 p. 312, 田部訳五二六頁)の二行目 "mine own hand" が第四版にのみ現われる形(初版から第三版までは一貫して "my own hand")である点から、ハーンの参照したのは第四版であろうと推測できる。

富山大学附属図書館へるん文庫所蔵のハーン旧蔵書中には、フィッツジェラルド訳は二点ある。

- *Rubaiyāt of Omar Khayyām in English Verse, The Text of the Fourth Edition, Followed by that of the First, with Notes Showing the Extent of His Indebtedness to the Persian Original, and a Biographical Preface*, New York & Boston: Houghton, Mifflin & Co., 1888.

- *Rubaiyāt of Omar Khayyām, the Astronomer-Poet of Persia, Rendered into English Verse*, Golden Treasury Series, London: Macmillan and Co., Limited / New York: The Macmillan Company, 1899.

前者は副題が示すように第四版と第一版を収録し、後者はポッター書誌 (p. 52, no. 154) によれば第五版と第一版の本文、なら

びに各版の異同を示す注や対照表が付されている。へるん文庫の書誌は以下による。

・ *Catalogue of the Lafcadio Hearn Library in the Toyama High School*, Toyama: Toyama High School, 1927, pp. 7, 27. 書架番号は97と398に対応。

・ 『ヘルン(小泉八雲)文庫目録』改稿版(稿)、富山大学附属図書館、一九九九年三月、S-10、S-38。

ハーンが引用した三十三首を、その順番に第四版の番号で記すと以下の通り。45・48・49・50・51・52・68・69・70・71・63・64・65・66・67・26・27・28・29・31・32・34・41・42・43・46・14・15・16・96・99・100・101。

(25) 田部訳の対応箇所は、順に五一八、五一九、五三二、五三三頁。このうち、“from Mah to Mahi”(月から魚まで)と“The Angel of the darker Drink”(死の天使イズラール)については、フィッツジェラルド訳第51歌・第43歌の注にそれぞれ“from Fish to Moon,” “Azriel”とある説明を利用したのであろう。ただし、フィッツジェラルド注は「月」manと「魚」mahの対応を逆転させており、しかも大地が巨魚の背中に載っているとするイスラムの世界観に基づくこの表現が「全世界」を意味することを付記していない点で不十分である。イズラールが死の天使であることも説明されていない。

“Ferrash”(下僕、家僕)と“Saki”(酌人)にはフィッツジェラルド自身は説明注を付していないが、前者については、第四版の第45歌に対応する第一版の序文中の詩句が“Chamberlain”となっているので、ハーンは両者を比較対照することで意味を理解できたであろう。

ハーンは来日前のニューオーリンズ時代(一八七八―一八七七年)に中東イスラム関係の論考を多く残しており、それなりに予備知識があったので、フィッツジェラルド訳では説明が不十分な点についても、自分で補うことができたものと思われる。

(26) 田部訳の対応箇所は、順に五一八、五二二、五二二、五二二、五二三、五三〇―三二、五三七、五三七頁。

(27) 厨川白村「小泉先生(近刊の講義集を讀む)」、同『小泉先生へのほか』積善館、一九一九年二月、一六頁。

(28) 田部訳の対応箇所は五一七頁。

(29) 田部訳の対応箇所は五三九頁。

(30) 厨川白村「小泉先生(近刊の講義集を讀む)」一二頁。傍点は原文。

(31) 上田敏「佛蘭西文學の研究」『帝國文學』第三卷八號、二頁。のち、同『文藝論集』春陽堂、一九〇一年十二月、二三七―三八頁。『定本上田敏全集』第三卷(文藝論集、最近海外文學、最近海外文學續篇)、教育出版センター、一九七八年十一月、一八六頁。単行本では「フィルツウシ」↓「フィルドゥウシ」(近四〇―一〇二〇)、「オマル、ケイヤムの律語」↓「オマア、カイヤム」(近一〇五―一〇二)の四行律と改める。全集はさらに「一一二」↓「一二三」とする。「フィルツウシ」はペルシア詩人フィラルダウスィー、『聖ブランドン御作業』は、アイルランドの聖者ブランドヌス St. Brendanus (四八六年頃―五七五年)を主人公とする『聖ブランドヌス航海記』*Navigatio Sancti Brendani Abbatis* (八世紀後半に成立。最古の写本は十世紀)のこと。ヨーロッパ各国語に訳されて流布した。『シビオの夢』は、ローマの弁論家キケロ Marcus Tullius Cicero (前一〇六―前四三年)の『国家論』*De Republica* 第六卷の一部をなす「スキピオの夢」*Somnium Scipionis* を指す。

(32) 上田敏「英詩管見」『反省雜誌』第十二年九號、一八九七年十月、二〇頁。のち、同『文藝論集』二二四頁。『定本上田敏全集』第三卷、一六八頁。単行本では「フィッツゼラルド」↓「フィッツゼラルド」(一八〇九―一八八三)、「オマア、ケイヤム」の四行詩律↓「オマア、カイヤム」の四行詩律(一八五九)と改める。以下も文章に異同が多い。

- (33) 上田敏「序」、オオマア・ケエヤム原著／片野文吉譯『ルバイヤット』開文館、一九二四年三月、二頁、四一七頁。のち、『定本上田敏全集』第九卷(研究考證、序跋、美術解説、小唄、聖教日課)、教育出版センター、一九七九年十二月、三七〇―七一頁。

- (34) 『官報』第四千八百九號、一八九九年七月十三日、五一―一頁。条約への加入が七月十二日付けで「公布」され、同一三頁掲載の「外務省告示第九號」に「本年七月十五日ヨリ加入ノ效力ヲ生セシムルコトナシタリ」とある。なお、当時のイギリスの一八四二年著作権法(Copyright Act of 1842)は、著作権の保護期間を著者生存中および歿後七年間、または初刊から四十二年間のいずれか長い方と定めていたため、『ルバイヤット』の著作権は一八五九年の初刊から四十二年後の一九〇一年までという計算になる。F. E. Skone James, "Copyright," *Encyclopaedia Britannica: A New Survey of Universal Knowledge*, 25 vols., Chicago, London, Toronto: Encyclopaedia Britannica, Ltd, 1950, Vol. 6, p. 413f.

- (35) 「絶念」は現代では一般に用いられない言葉であるが、『日本国語大辞典』(第二版全十五巻、小学館、二〇〇〇年十二月二〇―二年十二月、第六巻、二〇〇一年六月、一四〇七頁)は「思いきる」と。あきらめる」と。断念」として、丹羽(織田)純一郎譯『花柳春話』(四編、坂上平七、一八七九年一月、第五十八章、六四頁)、春のやおぼる(坪内雄藏)、『當世書生氣質』(合本、晚青堂、一八八六年八月、第十一回、二一七頁)などの用例を挙げている。

- (36) 『旧約聖書』「伝道の書」とフィッツジェラルド訳「ルバイヤット」の共通点については、例えば以下に具体的な比較がある。Morley Adams, *Onar's Interpreter: A New Life of Edward FitzGerald*, London: The Priory Press, 1909, pp. 148-50; *Ecclesiastes: or, The Preacher, with Notes and Introduction*, Edited by E. H. Plumptre,

- The Cambridge Bible for Schools and Colleges, Cambridge: The University Press, 1907 [ca. 1881], pp. 262-68, "Appendix III. A Persian Koheleth of the Twelfth Century." 後者に「こへつは」矢野禾積「近代英詩評釋」(三省堂、一九三五年二月)、八一頁の指摘による。
- (37) 上田敏「第五部 文藝史。第四章 伊太利亞、西班牙、葡萄牙、波蘭、露西亞、丁抹、瑞典、那威、和蘭、白耳義、匈牙利、新希臘文學」『太陽』第六卷八號(當時十九世紀)、一九〇〇年六月、一八九頁。のち、『定本上田敏全集』第八卷(沙翁書史その他、外國語論文、英文學史)、教育出版センター、一九八一年四月、四四頁。初出の誤植「壓」を「厭」に改める。なお、前注の *Ecclesiastes*, p. 268 にもレオパルディへの言及がある。

- (38) 上田敏「佛蘭西文學の研究」一九頁。『文藝論集』二五九頁。『定本上田敏全集』第三卷、二〇〇頁。初出と単行本では本文に異同あり。

- (39) 上田敏「第五部 文藝史」一八〇頁。のち、『定本上田敏全集』第八卷「一五頁。『全集』は初出の誤植「譯」を「譯」に改める。

- (40) Daniel Karlin, p. lxix; Mehdi Aminrazavi, *The Wine of Wisdom: The Life, Poetry and Philosophy of Onar Khayyam*, Oxford: One-world Publications, 2005, pp. 223-29.

- (41) 矢野峰人「去年の雪——京都の文藝講座」『主流』第十一号、同志社英文學會、一九四九年九月、二頁。のち、「京都の文芸講座」として、同「去年の雪」大雅新書1、大雅書店、一九五五年四月、八〇―八一頁。『矢野峰人選集』1(エッセイ・詩・訳詩)、国書刊行会、二〇〇七年六月、四九頁。

- (42) 矢野峰人「去年の雪——京都の文藝講座」四頁。「京都の文芸講座」八三頁。『矢野峰人選集』1、五〇頁。

- 矢野峰人「オーマー・カイヤムの翻訳」[私のコレクション]『日本古書通信』第二百二号、一九六一年二月十五日、二頁(のち、『矢野峰人選集』1、三六七頁)にも同様の記述がある。

- (43) 矢野峰人「上田敏先生の思ひ出」、同「去年の雪」一七六頁。

のち、『矢野峰人選集』1、一九九頁。

- (44) 矢野峰人「去年の雪——京都の文藝講座」四頁。同『去年の雪』所収の「京都の文芸講座」八四頁では、「私は此時の『ルバイヤート』講読によつてはじめてオマー・カイヤームの詩に接した」と文言を改めている。『矢野峰人選集』1、五〇—五一頁。

- (45) 蒲原有明「閑談・ロセッチの回想」『英文學』第一輯、一九四八年五月、一一四頁。これに先立つて、一九三九年十月十八日付の矢野禾積宛て書簡でも、「三十二年七月丸善出版の Victorian」は勿論早速に購入、熟讀玩味いたし候。(中略)オマー・カイヤームの四行詩も同様の事に候」と記している。矢野峰人「蒲原有明研究」國立書院、一九四八年四月、一二五—一二六頁。

- (46) ロセッチの訳詩四編、詩三編、ソネット連作「生命の家」からの抜粋六編。同書には他に、スウィンバーンの八編、キプリング Rudyard Kipling (一八六五—一九三六年)の二編が収められている。

- (47) 『文章世界』第二卷三號、一九〇七年三月、六三頁。「沙は燐けぬ」と題する四行十連の詩の末尾に「るばいやつと」の一節と付記して収録されている。同じ「沙」の縁でこの場所に入れたのであろう。

- (48) Bin Ueda, *The Victorian Lyre*, p. 3.

- (49) *Letters of Edward Fitzgerald*, 2 vols., London: Macmillan and Co., 1901, Vol. 1, p. 348; *Letters* 1980, Vol. 2 (1851–1866), p. 323; To E. B. Crowell, November 2, 1958. エジク羅斯は小さな庭園で質素に暮らし、「ただ水と一かけらのパンだけで満足する」「チーズを小壺に入れて送ってくれたまえ、したいと思えば豪遊することもできようから」などの言葉で知られていた。出隆・岩崎允胤訳『エジク羅斯 教説と手紙』岩波文庫、一九五九年四月、一四頁、一三三頁。『*Epicurus: The Extant Remains, With Short Critical Apparatus*, Translation and Notes by Cyril Bailey, Oxford: Oxford

University Press, 1926, pp. 130–31, 146–49.

- (50) 『時代別国語大辞典』室町時代編五、三省堂、二〇〇一年一月、四三〇頁。『角川古語大辞典』第五卷、角川書店、一九九三年三月、六五〇頁。十世紀前半成立の源順撰『倭名類聚鈔』二十卷本卷十六(器皿部第二十三、瓦器類第二百四)「甕」に「和名毛太非」、十世紀後半成立の『宇津保物語』「藏開(中)」に「るりのもたい」(『前田家本宇津保物語』古典文庫第百三十二冊、一九五八年七月、一〇八四頁)、十一世紀成立の『榮花物語』卷第十一「つぼみ花」に「甕のほとりの竹葉も」(松村博司・山中裕校注『榮花物語』上、日本古典文學大系75、岩波書店、一九六四年十一月、三五三頁)とある。

- (51) 『日本国語大辞典』第二版、第十二卷、小学館、二〇〇一年十二月、八〇四—八〇五頁。北川和秀編『続日本紀宣命 校本・総索引』吉川弘文館、一九八二年十月、一一—一二頁、第五詔(神龜元年二月甲午)「美麻斯」その他。

- (52) 薄田淳介「白羊宮」金尾文淵堂、一九〇六年五月、八頁。初出は「あ、大和にしあらましかば」として『中學世界』第八卷十五號、定期増刊菊花壇、一九〇五年十一月、五三頁「甘酒」。『日本国語大辞典』第二版(第二卷、二〇〇一年二月、四一三頁)は、この作品を「うまき」の語の初出としている。

- (53) この訳詩は、翌月の『藝苑』第二卷四号(一九〇七年四月、一〇一頁)に、新たな四首と併せて『ルバイヤット』より」と題して再録され(ただし、「行目」とを「下」と改める)、翌年一月刊行の『有明集』(易風社、一八九頁)では「歌の一巻樹のもとに、美酒の壺、糧の山、さては汝がいつも歌ひてあらばとよその沙原に、そや、沙原もまたの天國。」と、第三句の表現や全体の文字遣いにも変更を加えている。さらに『有明詩集』(アルス、一九二二年六月、五七—七三頁)では、「歌のひとつ巻樹のもとに、美酒のまたひ、糧の山、さては汝がいつも歌ひてあらばとよ、その沙原に、そや、沙原もまたの天國。」

と行分けを変えたことで「七五／七五／七七五／七七七」の音調になっている。

- (54) 第一版(第11歌)では第一・二句が“Here with a Loaf of Bread beneath the Bough, / A Flask of Wine, a Book of Verse — and Thou”に、第四句が“and Wilderness is Paradise enow”になっていた。第二版(第12歌)は“a Loaf of Bread”が“a little Bread”に、“and”が“On”に置き換えられ、第三版以降、掲出の形に変更された。各版の異同については Decker, p. 130.

- (55) Heron-Allen, 1898, pp. 272-73; Edward FitzGerald's *Rubā'iyāt of Omar Khayyām, with Their Original Sources*, Collated from His Own MSS., and Literally Translated by Edward Heron-Allen, London: Bernard Quaritch, 1899, pp. 22-23. 後者は以後Heron-Allen 1899を略記。なお、両書とも“padd” (限界)を“khadd” (頬)とアラビア文字に翻刻しているが、Heron-Allen 1898に掲載された写本の写真版を見てもこれは誤植であらう。

- (56) Arthur J. Arberry, *Omar Khayyām: A New Version Based upon Recent Discoveries*, London: John Murray, 1952, p. 23.

- (57) Heron-Allen, 1898, pp. 266-67; Heron-Allen, 1899, p. 25. 「命を繋ぐ糧」と訳した原語“sadd-e-ramaq”は「最後の息を止めるもの」が原義だが、転じて「糊口を凌ぐための最低限の食糧」の意味に用いられる。

- (58) Sādeq Hedāyat, p. 100, no. 98. 邦訳は小川亮作『ルバイヤート』改版、岩波文庫、一九七九年九月、七八頁。ただし、真作かどうか疑義が残るとしている。イギリスの東洋学者アーベリー A. J. Arberry (一九〇五—七〇年) は、曠野に詩集を携えてゆくという発想自体に異議を唱え、ウマルの時代であれば教養人は詩を暗誦していたので詩集は不要であったはずだし、そもそもイランの曠野には憩えるような木蔭は存在しないと述べている。A. J. Arberry, p. 23.

- (59) Fortūgh and Ghānī, p. 114, no. 175. 邦訳は黒柳恒男『ルバイ

ヤート』大学書林、一九八三年九月、一七七頁。ただし第二・三句は「二マンの酒と羊の腿肉とを与えてくれ／チューリップの類した人とともに庭の片隅に座すのなら」va-z mey do man-i-ze gūsfand-i-rān-i / bā lāle-rokh-i-yo gūsh-e-yē bostānī となる。

- (60) A. J. Arberry, p. 24.

- (61) 蒲原有明『ルバイヤート』より一〇〇頁。『有明集』一八七頁では、「巴比倫よ」と「絶間あらせず」の直後に読点を追加し、「將た」と「酒は」の助詞「は」とを削除。『有明詩集』五七一頁では、「はた」と助詞「は」とを復活させ、「散りゆかむ」の直後の読点は削除。「また酌む」を「酌むその」に、「甘し」のルビを「あまし」に置き換え、総ルビをパラルビに変更。

なお、有明が訳したのは、第四版の第8歌から第12歌。『有明集』一八七—九〇頁では、これらを「其一」とした上で、新たに「其二」として第28歌が付け加えられた。『有明詩集』五七一—七三頁でもその形式は踏襲されている。

- (62) Bin Ueda, *The Victorian Lyre*, p. 2. 第四版原典では、一行目末尾にカンマあり。四行目の“keeps”は“keep”の誤植。

- (63) Heron-Allen 1898, p. 164; “Baghdād,” *E. J. Brill's First Encyclopedia of Islam 1913-1936*, 9 vols., Leiden and New York: E. J. Brill, 1987, Vol. 2, p. 563.

- (64) 例えば、宛字外来語辞典編集委員会編『宛字外来語辞典』(柏書房、一九七九年十一月)には「ニーシャープール」に対する宛て字は登録されていない。

- (65) 内田正雄編『輿地誌略』大學南校、明治三年臘月(一八七一年一／二月)、卷三「比耳西亞」七丁ウ、「亞細亞土耳其」二〇丁ウ、二七丁ウ。

- (66) 吉田正春『探検波斯之旅』博文館、一八九四年四月、二七頁、四一頁。

- (67) 徳川時代以来、「バビロン」には「巴必鸞」(山村昌永『訂正増譯采覧異言』文化改元(一八〇四年)四月序、卷之七、二四丁

ウ)や「巴毗鸞」(檢夫爾著/志筑忠雄抄譯『異人恐怖傳』嘉永三〔一八五六〕年刊。文明源流叢書第三、國書刊行會、一九一四年二月、一八六頁)、「巴庇倫」(『米歐回覽實記』第二編、博聞社、一八七八年十月、一一〇頁、第二十五卷「倫敦府ノ記下」)などさまざまな宛て字が用いられてきたが、「巴比崙」の用例は見られない。『宛字外来語辞典』一五四頁参照。

- (68) Heron-Allen 1898, pp. 164-65; Heron-Allen 1899, pp. 16-17. なお、この一首は写本によって異同が大きいものの、ヘダーヤトもフォルギーとガニーも、それぞれの校訂版にウマルの作として掲載している。Sādeq Hedāyat, p. 99, no. 95; Forūghī and Chahmī, p. 84, no. 53. 小川亮作訳『ルバイヤート』七五頁。黒柳恒男訳、五五頁。

- (69) *Les Quatrains de Khéyam*, pp. 56-57, no. 105.

- (70) *Les Quatrains de Khéyam*, pp. 12-13, no. 18. Heron-Allen 1899, p. 19.

- (71) *Les Quatrains de Khéyam*, pp. 134-35, no. 266. Heron-Allen 1899, p. 19. によれば、これは、カウエルが筆写してフィッツジェラルドに送ったカルカタ写本の第三百七十七番の第一・第二句にほぼ相当する。ただし第二句は「枝から落ちる葡萄の葉のように」chon barg-e razān ze shākh と異同がある。

- (72) Heron-Allen 1899, pp. xi-xii. へのほか、ニコラ版のみに見られる作品に基づくもの二首(第46歌・98歌)、原詩全体の精神を反映したもの二首(第86歌・88歌)、アッターール Farīd al-Dīn 'Aṭṭār (一二二一年歿)の『鳥の言葉』*Manīq al-Tayr* に依拠したもの二首(第33歌・34歌)、原詩と同時にハーフィズ Ḥāfiz (一三九〇年頃歿)の抒情詩からも影響を受けたもの二首(第3歌および第52歌)、第三版以降削除された三首(第一版第33歌・45歌、第二版77歌)は原典が見当たらないという。ハーフィズの影響について、Heron-Allen, *Some Sidelights*, pp. 11-16 に分析がある。

- (73) 石澤の閲歴については、長男・誠一氏による略伝「人と思

想」石澤久五郎——湛山と歩んだ自由主義者」(『自由思想』第二十四号、一九八二年八月、五一—五九頁)、および石澤の従妹で後の石橋湛山(一八八四—一九七三年)夫人・岩井うめ(梅子)による石橋梅子「思い出の記」(『石橋湛山全集』第十五巻、東洋経済新報社、一九七二年九月、「月報」15、四—一一頁。のち、長幸男編『石橋湛山——人と思想』東洋経済新報社、一九七四年七月、二二四—三八頁)に詳しい。以下、石澤の略歴は主としてこれらに依拠し、それ以外の資料からも適宜事実や典拠を追加した。

- (74) 大正四年十一月調『^{早稲田}早稲田学校友會會員名簿』二七頁。なお、国立国会図書館の蔵書目録では「久五郎」を「ひさごろう」と訓んでいるが、後出の『産業視察報告 第五篇(羽二重業)』の英文要旨や、石澤自らが編輯していた『銀行通信録』の毎回の英文目次では、筆者名を「K. Ishizawa」としていること、養子となった第二代久五郎の本名が「久作」であったことなどを勘案すると、「きごろう」が正式の訓みではないかと思われる。本名のほか、彼はしばしば「水湖」の筆名を用いている。

- (75) 村野孝顯『佛教海外傳道史』北米山禪宗寺、一九三三年二月、二九〇頁。同書は西島の姓に「にしぎき」と訓みを付している。西島は一九〇二年九月に帰国後、東京慈恵會醫院醫學專門學校を卒業して早稲田病院を設立、貧困者救済に貢献した。中西直樹「仏教慈善病院「早稲田病院」と西島寛了」『龍谷史壇』第百二十九・百二十合併号、二〇〇三年三月、一七八—一九一頁。

- (76) 水湖生「英文法句經和譯(三十二)」『米國佛教』第八年四號、一九〇七年四月、一〇頁。

- (77) 水湖生「厨房小言(上)(中)(下の一)(下の二)」『米國佛教』第七年八一十二號(第九號を除く)、一九〇六年八一十二月、一七—二二頁、一九一二頁、一七—二〇頁、一一—一五頁。

- (78) 井上辰九郎「序」、石澤久五郎『本邦銀行發達史』同文館、一九二〇年十月、四頁「著者石澤君は夙に早稲田大學を出つ。後、

米國に留學すること數年、アイオワ大學、ウキスコンシン大學、及びクラーク大學に學び、所定の學業を了へたり」。北米内部での移動の軌跡は、石澤が折に触れて『米國佛教』に寄せたエッセイなどから跡づけることができる。赤毛布生「市俄古に着きたるとき」第五年七號、一九〇四年七月、一七一—一八頁。氷湖啞人「旅のすさび」第五年九號、九月、二二—二三頁。「會員消息」第八年七號、一九〇七年七月、三九頁。「會員消息」第八年九號、九月、三四頁。氷湖生「紐育に於ける我觀小景(一)」第十年六號、一九〇九年六月、五一—九頁。

(79) 井上辰九郎「序」四頁。

(80) 石澤が『米國佛教』『東洋時論』および『新佛教』にエッセイを寄せている。

・氷湖生「船酔」『米國佛教』第十一年一號、一九一〇年一月、一七一—二三頁。同「佛國たより」第十一年四號、四月、九一—一三頁。同「佛國だより(二)」第十一年五號、五月、一〇—一二頁。同「そのをりく(十四)」第十一年九號、九月、九—一二頁。

・石澤生「倫敦素通記」『東洋時論』第二卷十二號、一九一一年十二月、九六一—一〇三頁、同「倫敦素通記(其二)——(其四)」第三卷第一—四號、九五—一〇〇頁、一四九—一五二頁、一三五一—三六頁、一二〇—一二三頁。*「其二」が二回重複している。

・「旅行日記の斷片(上)(下)」『新佛教』第十三卷四—五號、一九一二年四月—五月、四二〇—二七頁、五四〇—四七頁。

(81) 石澤は、大日本百科辭書『經濟大辭書』(全八卷、同文館、一九一〇年十二月—一九一六年四月)に第二卷から第八卷まで「商業及商業政策」の項目を執筆しているが、一九一三年五月刊行の第五卷のみ「ドクトル・オプ・フィロソフイエ」の肩書に「京都同志社講師」を添えている。

(82) 原著は Richard T. Ely and George Ray Wicker, *Elementary Prin-*

ciples of Economics, Together with a Short Sketch of Economic History, New York: Macmillan, 1904.

(83) 福島縣海外産業視察員としての報告書。帰国後に富山・石川・福井・山形の各機業地を視察した知見も盛り込まれている。

(84) 原著は Wm. Morton Fullerton, *Problems of Power: A Study of International Politics from Sadowa to Kirk-Kilissé*, London: Constable, 1913. 例言に「本書の翻譯は「ドクトル・オヴ・フィロソフイ」石澤久五郎氏の手を煩はしたり」とあるが、奥付の「編輯兼發行者」は大日本文明協會になっている。

(85) 原著は Henry Rogers Seager, *Introduction to Economics*, New York: Henry Holt and Co., 1904.

(86) これに先立つて『銀行通信錄』に第六十四卷三百八十四號(一九一七年十月)から第六十八卷四百八號(一九一九年十月)まで連載した「明治時代の銀行發達史(一一—二三)」の単行本化。

(87) 原著は W. Randolph Burgess, *The Reserve Banks and the Money Market, with an Introduction by Benjamin Strong*, New York: Harper, 1927. 東京銀行集會所會長・串田萬藏の「序」七頁に「本書の邦譯に就いては所員石澤久五郎君専ら其の任に當り」とあり、奥付の「編輯兼發行者」も石澤となっている。

(88) *The Dhammapadam: A Collection of Verses, Being One of the Canonical Books of the Buddhists*, Translated from Pāli by F. Max Müller. The Sacred Books of the East, Vol. 10, Oxford: Clarendon Press, 1881.

(89) *Hymns of the Faith (Dhammapadam): Being an Ancient Anthology Preserved in the Short Collection of the Sacred Scriptures of the Buddhists*, Translated from the Pāli by Albert J. Edmunds, Chicago: Open Court, 1902.

(90) 法救撰の漢訳法句經は『大正新脩大藏經』第四卷(本緣部下、大正一切經刊行會、一九二四年七月)、五五九—七五頁に収め

られている。当時はすでに、マックス・ミュラー英訳からの抄訳が『法の道芝——達摩波陀抄譯』（加藤正廓譯述、島地黙雷・赤松連城閣、松山・加藤正廓、一八八二年三月）として刊行されていた。

- (91) 第八年十號、一一—一二頁（第1歌—第10歌）、第十二號、八—九頁（第11歌—第20歌）。第九年一號、三—三三頁（第21歌—第40歌）、二號、一一—一二頁（第41歌—第48歌）、三號、一三—一五頁（第49歌—第60歌）、五號、九—一〇頁（第61歌—第70歌）、六號、一一—一三頁（第71歌—第81歌）、八號、一四—一五頁（第82歌—第90歌）、九號、五—七頁（第91歌—第101歌）。歌の排列により第三版または第四版と推定され、さらに両者間で措辭に異なるある第38歌の訳によつて第四版と判断できる。

- (93) 二六—二八頁、八一—八二頁。典拠となつた参考書の記載を欠くが、冒頭に「オーマア傳の著者にして波斯人たるシラジ氏」とあるのは、J. K. M. Shirazi, *Life of Omar al-Khayyami*, Edinburgh & London: T. N. Foulis, 1905 である。

- (94) 石澤氷湖「オーマア、ケーヤアム（波斯の詩人）（一）其の生涯」、「オーマア、ケーヤアム（波斯の詩人）（二）其の内部生活」、石澤氷湖譯「オーマア、ケーヤアムの四行詩（三）」『新佛教』第十三卷六・十一・十二號、一九二二年六・十一・十二月、六四三—五〇頁、一四五一—五一頁、一二三九—五一頁。

なお、第十三卷七號と八號（一九二二年七・八月）の挿絵は「石澤夫人」と目次にある。石澤誠一「石澤久五郎」五三—五四頁、および石橋梅子「思い出の記」六頁（單行本二二八頁）によると、石澤は一九一一年六月に荒木寛畝門下の女流画家・永野辰子と結婚したばかりだった。

- (95) 不寄生「石澤久五郎氏逝く」（『木堂雜誌』第十五卷五月號、一九三八年五月、二八—三〇頁）によると、「大正の初年、鈴木梅四郎翁を中心とする青年社會政策學會」「高島米峰先生等の動物愛護會」「新佛教徒の集り」「西川光二郎先生の古事記研究會」な

ど多くの会に参加し、早稲田の同窓である小説家・評論家の白柳秀湖（本名は武司。一八八四—一九四〇年）と親しく、雑誌『實生活』にも長いあいだ執筆していた。石澤誠一「石澤久五郎」五六頁の記すところでは、同誌への執筆期間は二十余年に亘り、一九三七年四月号から五回連載の「議會政治の回顧と展望」が最後の寄稿になった。明治新聞雑誌文庫所蔵分だけでも、第三十六號（一九一九年九月）の「經濟生活改造の目的及び方法」から第八十四號（一九三三年九月）の「殘暑漫筆」まで、合計三十九回寄稿している。『東京大学法学部附属明治新聞雑誌文庫所蔵雑誌目次総覧』第百三十五卷（総合編）、大空社、一九九七年九月、「雑誌別著者名索引」一九—二〇頁。

山陰日日新聞主筆時代には國民黨の犬養毅（号は木堂。一八五五—一九三二年）と交わり、『犬養木堂傳』下卷（東洋經濟新報社、一九三九年六月）の「諸家木堂觀」五四—四三頁にも「國史上に加へた莊嚴なる一頁」を寄稿している。

一方、石橋湛山との縁で、一九一四年五月に湛山が幹事となつた自由思想講演會に三浦鎮太郎（一八七四—一九七二年。早稲田の同級生）、田中王堂（本名は喜一。一八六七—一九三二年）らと、一九一九年十月には鈴木梅四郎（一八六二—一九四〇年）を会長とする米穀專賣研究會に湛山や白柳秀湖らと、さらに一九二二年十一月に湛山が作つた金融制度研究會にも井上辰九郎（一八六八—一九四三年）、大内兵衛（一八八八—一九八〇年）、三浦鎮太郎らとともに参加している。石橋湛山「湛山回想」毎日新聞社、一九五一年十月、二三七—三八頁、二七〇—七一頁。のち「石橋湛山全集」第十五卷、一五〇—五一頁、一七一頁。また、同卷所収「石橋湛山年譜」三四九頁、三五七頁、三五九—六〇頁。石澤誠一「石澤久五郎」五四—五六頁。

また、田中正造（一八四一—一九一三年）の遺徳を偲び、一九二二年十月に「正造會」を立ち上げてゐる。氷湖「萬物相」『實生活』第七十四號、一九二二年十一月、四一—四六頁。

(96) 石澤誠一「石澤久五郎」五八頁によると、「早くから和歌をよみ、明治二十八年頃個人歌集として『下萌集』が残っており、その後も折にふれて詠んでいる」。

(97) 水湖生「吾が消息」『米國佛教』第八年十二號、一九〇七年十二月、一八頁。

(98) 『米國佛教』第八年十二號、八頁。

(99) 『新佛教』第十三卷十二號、一二四一頁。

(100) 『米國佛教』第八年十號、一九〇七年十月、一一一二頁。

(101) 『新佛教』第十三卷十二號、一二四〇頁。

(102) 数例を挙げる。「旅舎」^{やどり}「宿舎」^{やど}Tavern (第2歌・58歌・77歌)は「居酒屋」^{やど}「塵」^{ちり}Dusk (第58歌)は「薄闇」^{うすやみ}「門守」^{かどまもり}Porter (第90歌)は「荷担ぎ屋」^{にがたりや}「酒神の使」^{さけがみ}Angel of the darker Drink (第43歌)は「黒い酒を酌ぐ死の天使」^{くろいさけをしやくぐしのかみ}「闇黒なる使」^{やみくろなるし}dark Ferrish (第45歌)は「黒人の下僕」^{くろにんのかみ}「吾が名はいやしみの歌となりたり」^{われがなはいやしみのうたとなりたり}sold my Reputation for a Song (第93歌)は「名声を捨て値で売った」^{なづかひをうりかへて}。

(103) 例えは、「人々と」^{ひとと}With them (第28歌)の代名詞は、直前の第27歌の「博士や聖者」^{はくしやせいじゃ}Doctor and Saintを受ける。「耻としも汝思はずや」^{はづかしとしもなんぢをおもはずや}we're not a Shame for him (第44歌)の代名詞は「靈魂」^{たましい}Soulを受ける。「演ずるもみるも同じく我の我をみるなり」^{あそぶるもみるもおなひくわれのわれをみるなり}He doth Himself contrive, enact, behold (第52歌)の代名詞は「彼」^{かれ}すなわち「神」^{かみ}を指す。「酒盛る少女あるがう」^{さけもてるしょうよあるがう}like her, oh Saki (第101歌)の代名詞は直前の第100歌の「月」^{つき}Moonを受ける。

(104) 例えは、「あゝ 如何に彼等のいそぐよ」^{ああ いかにかれらのいそぐよ}Oh, make haste! (第48歌)は「さあ急げ」という二人称に対する命令形。「満たせ盃 To fill the Cup (第62歌)は「盃を満たすために」という目的を表わす不定詞の副詞的用法。「何れの蔓か／からみまどふと あさは言へり回教僧は」^{あさはいへりかいしやうは}which about / If clings my Being — let the Dervish flout (第76歌)は「もし私の身体がその(蔓の)まわりに纏わりついて、托鉢僧には嘲笑うがままにさせておけ」^{もしわらわがたつぽうしにわらわがままにさせておけ}If my

Being clings about the Fibre, let the Dervish flout が直訳。「罪の許を 汝はなひて再び奪ふ」^{つみをなんぢはなひてふたたびうばふ}Man's Forgiveness give — and take! (第18歌)は「人の赦しを(罪に)与え、自らも赦しを乞え」という命令形。

(105) 『米國佛教』第九年二號、一九〇八年二月、一一頁。

(106) Decker, pp. 102, 163. なお、ヘロン＝アレンによれば、この詩の源泉は、ボドレー写本第百二番の後半句「結局お前は無となるのだから／お前が無となることを考えて、生あるうちに楽しむがう」^{けつぐうおまへは無となるのだから／おまへが無となることをおもひて、いまだに生あるうちにたのしみむがう}chon akher-e kār nist khāhī būdan / angār ke nistf cho hasī khosh bāsh. Heron-Allen 1899, pp. 66-69; Heron-Allen 1898, pp. 218-21.

(107) 『米國佛教』第九年一號、一九〇八年一月、三二頁。

(108) Decker, pp. 99, 144. ヘロン＝アレンによれば、この詩の源泉は、ボドレー写本第七十六番の後半句「書物と恋人の唇と緑の岸辺を手放すな／土がお前を抱擁するまでは」^{しよぶつとこひのくちびるとろのきしをてはなすな／どろがおまへをいだかむまでは}ma-ghdār keāb-ō lab-e yār-ō lab-e keshī / z-ān pīsh ke khāk dar kenār-at gīdā. Heron-Allen 1899, pp. 40-41; Heron-Allen 1898, pp. 192-95.

(109) 『米國佛教』第九年五號、一九〇八年五月、九頁。

(110) Decker, pp. 105, 190. ヘロン＝アレンによれば、この詩の源泉は、ボドレー写本第三十三番の後半句「地獄は我らの無益な苦しみの火花／天国は我らの満たされた時の一瞬」^{じごくはわれらのむえきなしみのひかり／てんごくはわれらのみちみちたときの一しん}dūzakh shara-i ze ranj-e bīhūde-ye mā-st / ferdows dam-i ze vaqt-e āmūde-ye mā-st. Heron-Allen 1899, pp. 100-01; Heron-Allen 1898, pp. 150-51.

(111) 大住舜「『ルバイヤット』(Rubāiyāt) (上)」『新佛教』第九卷二號、一九〇八年二月、一六七—一七二頁。大住嘯風「『ルバイヤット』(下)」『新佛教』第九卷四號、四月、三三三—三三七頁。同『自然より人生へ』三〇—一五三頁。『實生活と思想』は「自然より人生へ」の再刊。なお、大住訳については、大澤広嗣「明治仏教と中東イスラーム世界の接点——雑誌『新佛教』の論説から」(『近代日本における知識人宗教運動の言説空間——『新佛

教』の思想史・文化史的研究」科学研究費補助金基盤研究B、研究課題番号二〇三〇〇一六、代表・吉永進一、二〇〇八—一一年度、一七八—八六頁）、一八二—八四頁に言及がある。

- (112) 「大住氏の略歴」『あみ・ど・ぱり』第三卷一號、一九三六年一月、二四頁。フランスの佛教學者シルヴァン・レヴィ Sylvain Lévi (一八六三—一九三五年) の計報と併せ、嘯風十三回忌に際して回想が載せられている。『東洋大学人名録 役員・教職員戦前編』(東洋大学井上四郎記念学術センター、一九九六年三月)、二九頁によれば、嘯風の東洋大学在任は一九一七年から一九年三月まで、身分は「教授」、一九一七年度には「基督教文明史」を担当。なお、野上彌生子(一八八五—一九八五年)の『日記』一九二四年二月十三日条に、日本での嘯風の葬儀に関する記載がある。『野上彌生子全集』第II期第一卷、岩波書店、一九八六年十一月、一一八頁。

- (113) 大住嘯風「満ちヤンを送る」『新佛教』第十二卷一號、一九一一年一月、四五—四九頁(目次題は「送石井柏亭」)。『柏亭自伝』(中央公論美術出版、一九七一年七月)、三五—三七頁にも嘯風の思い出が記されている。

- (114) 大住嘯風「執金剛を葬るの辭」『新佛教』第十四卷五號、一九一三年五月、四三〇頁。

- (115) 赤松徹真・福岡寛隆編『新佛教 論説集 補遺』(永田文昌堂、一九八二年七月)所収の「『新佛教』総目次」によれば、同誌に石澤は二十一回、嘯風は二十四回寄稿している。ただ、嘯風の最初の寄稿が第八卷十一號(思潮の交渉(上))一九〇七年十一月)、石澤の最初の寄稿が第十三卷四號(旅行日記の断片)一九一二年四月)で、嘯風の方が四年以上早く登場し、両者とも廢刊号である第十六卷八號(一九一五年八月)に寄稿している。石澤の「オーマア、ケーヤアム」に関する論考を嘯風は当然目にしていただであらう。

なお、嘯風は『新佛教』へ寄稿した論考のうち、『ルバイヤ

ット』以外にも「批評論」(第九卷六—八號、一九〇八年六—八月)と『ファウスト』の動機」(第十卷八號、一九〇九年八月)を『自然より人生へ』に再録している。

- (116) 大住舜「ルバイヤット」(Rudaiyat) (上)、一六七頁。『自然より人生へ』三〇—一〇二頁。単行本では「固淡」は「枯淡」と修正され、他にも多くの異同が見られる。

- (117) 石澤訳の場合と同様、詩編の排列順序から第三版ないし第四版が候補となるが、両者間で異同がある第38歌の訳から第四版と判断できる。

- (118) 大住舜「ルバイヤット」(Rudaiyat) (上)、一六八頁。『自然より人生へ』三〇八頁。単行本では「食」を「噉」に、末尾の「めかし」を「ならめ」に替えている。

- (119) 『時代別国語大辞典』上代編、三省堂、一九六七年十二月、六九七頁。倉野憲司・武田祐吉校注『古事記 祝詞 日本古典文学大系1』、岩波書店、一九五八年六月、「祈年祭」二八六—八七頁、三九二—九三頁「厩の上高知り、厩の腹満て雙べて」。九世紀の字書である昌住撰『新撰字鏡』天治本(一二二四年写本)の卷第五、瓦部第五十三「甕」に「瓮也美加」などある。前出の薄田淳介「ああ大和にしあらましかば」にも「美酒の甕」という表現が用いられていた。

- (120) 大住舜「ルバイヤット」(Rudaiyat) (上)、一六八頁。『自然より人生へ』三〇六頁。「泌」は「沁」とあるべきところ。単行本では「ハビロン」↓「バビロン」、「護れよし」↓「護れかし」と修正。

- (121) その他、若干の例を挙げ、対応すると思われる原語があれば付記する。

- ① 名詞「鶏」Cock (第3歌)、「饗宴」Supper, Carouse (第10・55歌)、「ほがひ」(第101歌)、「塔」Tower (第25歌)、「天皇」sovereign (第59歌)、「常葉堅葉」(第61歌)、「八鹽美酒」(第61歌)、「わびくれ」(第70歌)、「申文」(第73歌)、「はたもの」Penalties (第78歌)。

「舌鏡」loquacious (第83・87歌)、「みけ」Vessel (第85歌)、「あうやめさゆ」not unfrequented (第91歌)、「天馳使」Angel (第98歌)。「申」の歴史的仮名遣いは「まうし」とあるべきところ。「八鹽美酒」は、薄田淳介「ああ大和にしあらましかば」の「八鹽折／美酒の甕のまよはしに」(『白羊宮』七—八頁)を意識しているかもしれない。「八鹽折の酒」は『古事記』上巻、須佐之男命と八保遠呂智(大蛇)の逸話に見られる言葉で、何度も繰り返し醸造した強い酒を言う。倉野憲司・武田祐吉校注『古事記 祝詞』八六—八七頁。

- ② 動詞「そ、はしる」crept, Running (第22・51歌)、「足らぬ」make the most of, prepare, fulfill'd, to the Heart's Desire (第24・25・67・99歌)、「催ふ」After-reckoning, Sue (第62・79歌)、「なよぞ」went, abide, a moving row (第17・44・68歌)、「難んず」cannot (第79歌)。

- ③ 形容詞「他」another (第45歌)、「無益」(第72歌)、「いからし」(第87歌)。

- ④ その他「ゆたの、たゆたに」flowing (ゆったり揺れ動くさまを表わす連語。第33歌)、「なぐ」through (「…とどむ」の意味の接続助詞。第58歌)、「がり」within (「…の許に」の意味の接尾辞。第82歌)。

- ⑤ 造語と思われる独自の表現「けじめゝ、」alternate (第17歌)。「區別しつゝ」の意味か。歴史的仮名遣いは「けぢめ」。「列なむ」with His Pomp, come and go (第17・68歌)。「連ねる」の意味か)。「和毛す」Fledges (第20歌)。「羽毛で覆う」意味か)。「めぐはし」lovely, loveliest (第20・22歌)。「美しい」意味の「まぐはし」と同義か)。「もろす」prest (第22歌)。「醸造する」の意味か)。「すまゝ」takes (第45歌)。「過」の意味か)。

- (122) その他の例を若干挙げる。「渴仰」devoutly (第40歌)、「裸形」naked (第44歌)、「冥府」Death, Hell, baser Earth (第45・63・81歌)、「去來」Coming and Departure, Up-AND-DOWN (第47・56歌)。

- 「刹那」A Moment, A moment (第48・52歌)、「生」BEING, Hour (第48・54・68歌)、「常住」(第51歌)、「因明」Logic (第56歌)、「來生」After-life (第66歌)、「所願」Desire (第67歌)。「虚無」Nothing (第78歌)。「覺」conscious (第78歌)。「無形」shapeless (第84歌)。「奈落迦」Hell (第88歌)。「名聞」Reputation (第93歌)。「住」「明」「形」「名」の歴史的仮名遣いは「ぢゆう」「みやう」「ぎやう」「みやう」とあるべきところ。

- (123) 大住舜『ルバイヤット』(Rubāyat) (上)、「一六七頁。『自然より人生へ』三〇二頁。単行本では「追」↓「逐」とする。

- (124) 「Tram」は『コーラン』第89章7節で言及される、古代アラビアの巨人族が建てたとされる伝説上の楽園。「Pehlev」はパフラヴィー語(中世ペルシア語)。「Ferrāsh, "Sakt"」は前注(25)で記したように「下僕」「酌人」。「Alif」はアラビア語の最初の字母の名前。嘯風は「イラム」「ペレービ」「フェルラシ」をすべて人名と解している。

- (125) 主として単語・連語の次元での誤解の例を以下に若干示す。
「樹枝を去り」on the Bough/Puts out (第4歌)。「枝に芽吹く」。「冠」Throne (第11歌)。「玉座」。「うたむ」Sigh for (第13歌)。「慕う」。「乾せ」Have drunk (第22歌)。「彼らは乾した」。「葡萄酒」Minister of Wine (第41歌)。「酌人」。「暗黒の天使」は酒に酔ひAngel of the darker Drink (第43歌)。「黒い酒を酌ぐ死の天使」。「打ちては落す」Strikes (第45歌)。「天幕をたたむ」。「今日」をば見よや」gaze To-day (第53歌)。「今日あなたは見る」。「酒甕を肩にかけたる」黄昏」an Angel Shape/Bearing a Vessel on his Shoulder (第58歌)。「酒甕を肩にかけたる天使の姿」。「十七」Two-and-Seventy (第59歌)。「七十二」。「豫言者の燃ゆる思惟」Prophets burn'd (第65歌)。「火刑に処された預言者たち」。「此身を投げよ」Cast (第67歌)。「投影された」。「そのうゝ」As (第82歌)。「…のうゝ」。「歌の一手を名聞にあがなひたりき」sold my Reputation for a Song (第93歌)。「名声を捨て値で売った」。「誓を爲すまへ

に幾度か／悔恨の念はおこれ」Repentance oft before / I swore (第94歌。「以前に何度か誓った悔恨」)。「悔」の歴史的仮名遣いは「くわい」。

- (126) 大住舜『ルバイヤット』(Rubāyāt) (上) 一六九頁。『自然より人生へ』二二二頁。

- (127) Decker, pp. 98, 137. ヘロン＝アレンによれば、この詩の源泉は、カルカタ写本の第九十九番「バフラームが酒杯を手にしたあの王宮では／狐が仔を産み獅子が憩うている／いつも驢馬を捕らえていたバフラームも／見よ今や墓が彼を捕らえている」ān qasr ke bahrām dar-ū jān gereft / rībah bahe kard-o shir ārām gereft // bahrām ke gūr mī-gereft dāyem / emrūz negar ke gūr bahrām gereft. ペルシア語“gūr”に「驢馬」と「墓」の両義があることを利用した掛詞になっている。Heron-Allen 1899, pp. 32-33.

- (128) 石澤訳は以下の通り。「傳ふらくすやびては獅子のやまよひとかけ巢くふと／その宮廷には王ジヤムシユート榮え且酒宴せり／また偉なる獵人 王バアーラムも、曾て野馬の／王の頭を打たるも眠より覺めざりしとふ」。『米國佛教』第八年十二號、一九〇七年十二月、九頁。嘯風訳よりは遙かに原文に忠実だが、後半句を過去の事実と解釈している点にやや問題がある。

- (129) 『英國ふいし』(波斯文家詩人) おまかいやむ四行歌 百句『One Hundred Quatrains from the Rubāyāt of Omar Khayyām, Translated into Japanese chiefly from the FitzGerald Version, by Dr. H. Kakise, Worcester, Mass.: Clark University, 1910. 訳者と訳書の出版事情については、つとに重久篤太郎(一九〇三―八四年)による紹介があった。『日本近世英學史』教育圖書、一九四一年十月、一四六―五八頁「ルバイヤット」最初の邦譯本。重久は一九三一年十一月二日、蠣瀬に直接面会して情報を得たという。なお、蠣瀬訳はポッター書誌(p. 151, no. 497)にも登録されている。

- (130) 心理学者としての蠣瀬については、佐藤達哉・溝口元編著『通史 日本の心理学』(北大路書房、一九九七年十一月)の第四章

「心理学研究の自立・学会・留学・実験」一〇〇―二頁、佐藤達哉「日本における心理学の受容と展開」(北大路書房、二〇〇二年九月)、二五四―五六頁に詳しい紹介がある。

- (131) 佐藤達哉「日本における心理学の受容と展開」五四九―五四四頁。同「蠣瀬彦蔵——フロイトと記念写真に写った日本人」ぐらふいっく日本心理学史「第三回」『心理学ワールド』第三号、一九九八年十月、三〇頁。蠣瀬彦蔵「フロイト教授の印象」『雑誌』「應用心理」第一卷六號、一九三一年九月、四五―四七頁。

- (132) 重久篤太郎「日本近世英學史」一五五―五六頁。蠣瀬訳の「緒言」にも刊行事情の一端が記されている。

- (133) 重久前掲書によると、実際に用いた底本は *Rubāyāt of Omar Khayyām*, English, French, German, Italian, and Danish Translations Comparatively Arranged in Accordance with the Text of Edward Fitzgerald's Version, Edited by Nathan Haskell Dole, 2 vols., Boston: L. C. Page and Company / London: Macmillan & Co. Limited, 1905 [1898]. ポッター書誌(p. 173, no. 576)の情報では、第四版、第二版本文を収め、各版の異同一覧が付されている。

- (134) 各歌の下欄には典拠となった版とその番号が明記されている。第二版から追加されたのは、第14歌と第107歌、第五版から削除されたのは第50歌と第83歌、また第75・76・77・92歌はそれぞれホワインフィールド版の第140・197・262・17歌に置き換えられている。第51・52歌は併せて一首に訳されたため、合計で百首となる。なお、第15歌と第16歌は原詩と訳が逆転している。

- (135) この「なり」を終止形に接続する伝聞・推定の助動詞と取れば、原詩の“they say”とうまく対応するが、第二句「ねぐらなり」の「なり」は体言に接続する断定の助動詞なので、この解釈には無理がある。

- (136) わずかながら問題のある訳語を挙げる。第41歌「さけのかみ」Minister of Wine(「酌人」)、第45歌「くろおに」dark Ferrāsh(「黒人の下僕」)、第62歌「つちとく」さかづきの「when

crumbled into Dust (碎かれるのは「盃」Cupではなく「私」I)、第93歌「うられ うたのため」sold... for a Song (「捨て値で売った」、第99歌「あいのかみ」Love (「恋人」))。

(137) 逆に規定の音数に満たない場合は、原詩にない言葉を補っている。例えば、第47歌「やまのすな」(山の砂)、第49歌「ねんぶつに」(念仏に)、第60歌「にくも身も」(肉も身も)、第90歌「はせゆきぬ」(馳せ行きぬ)、第97歌「しんによの うみ」(真如の海)。

(138) いくつか例を示す。Wはホワインフィールド版。第3歌「さけべらく」↓「さけぶらく」(準体助詞「らく」は四段動詞終止形に接続)、第44歌「ぬぎすたば」↓「ぬぎすてば」(下二段動詞「捨つ」の未然形+順態の仮定条件を示す助動詞「ば」、第67歌「ぼんなふ」↓「ぼんなう」(「煩惱」の歴史的仮名遣い)、第73歌「つくらる」↓「つくるる」(受身の助動詞「る」の連体形)、W140歌「みちも しかれたり」↓「みちも ひかれたり」、第87歌「きゝゐた」↓「きゝゐたる」(完了・存続の助動詞「たり」の連体形)、第89歌「ひからべり」↓「ひからびたり」(「ひからぶ」は上二段動詞。完了・存続の助動詞「り」は四段動詞・サ変動詞にのみ接続する)、第90歌「まつたる」↓「まちたる」(完了・存続の助動詞「り」は連用形に接続する)、第96歌「かんばし」↓「かんばしき」(シク活用の形容詞の連体形)、第97歌「よみがへ」↓「よみがへり」(四段動詞連用形)、第99歌「はかなき」↓「はかなく」(連用形)、第100歌「みたなん」↓「みちなん」(上二段動詞「満つ」の連用形+完了の助動詞「ぬ」の未然形+推量の助動詞「む(ん)」)。

(139) いくつか例を挙げ、対応する原語があれば併記する。Wはホワインフィールド版。第11歌「なのせやう」name... is forgot (「名前を忘れられた」、第37歌「ぬれと」wet Clay (「濡れた土」)、第46歌「つくり えかねん」(可能を表わす動詞「得る」と不可能を表わす動詞「兼ねる」の重複)、「むじん むやう」Millions

(「無尺蔵」、第64歌「ひやく まんまん」myriads (「百万々」)、第65歌「ねむり」Stories (「寝言」)、第68歌「みもの」Master of the Show (「見世物師」)、第72歌「やかしの」inverted (「かしまの」、W197歌「もとより はじめより」Before Time was (意味の重複)、W262歌「くどく きゝめあり」better (意味の重複)、第78歌「ういしき」conscious (「有意識」)、第80歌「たのしみ たのしむ」Pleasure (重複表現)、第80歌「かけある」Beset (「懸けたる」)、第81歌「なむかし」(「あなかし」)、W17歌「はぐからより」from out my tomb (「灰から」)、第82歌「かばしきにほひ」bouquet (「かんばしきにほひ」)、第83歌「むしんじや」(「無信仰者」)、第107歌「つみ つんで」(重複表現)。

(140) 『新時事文藝週報』第百六十五號、一九〇九年七月七日、第一面。原文は総ルビ。

(141) 『新時事文藝週報』第百六十七號、七月九日、第一面「内外百書選定(一)」。

(142) 『新時事文藝週報』第百七十三號、九月一日、第一面「内外百書選定(七)」。

(143) 『新時事文藝週報』第百七十五號、九月十五日、第一面「内外百書選定(九)」。

(144) 魯庵生「書齋生活(承前)第一 書籍の選擇(二)」『學燈』第十四年十一號、一九一〇年十一月、五―七頁。のち、『内田魯庵全集』第六卷(隨筆・評論II)、野村喬編、ゆまに書房、一九八四年十一月、二九六―三〇〇頁。

(145) 『スバル』第二年一號、一九一〇年一月、一七四頁。のち、木下空太郎『和泉屋染物店』東雲堂書店、一九二二年七月、九七―九八頁。『現代戯曲全集』第十一卷、國民圖書、一九二五年七月、五九七頁(木下空太郎全集『第三卷(戯曲I)』、岩波書店、一九八一年七月、一四七頁)、『和泉屋染物店』では「夜」↓「夜」、「己」↓「己」、「云つた」↓「云うた」、「汝で」↓「汝で」、「美しい汝ぢやもの美しい酒の娘の」↓「美しい汝ぢやもの、酒の娘の」。

『現代戯曲全集』ではさらに「云うた」↓「云ふた」、「追ふた」↓「追うた」と変更を加え、「(OMAR KHAYYAM)」は削除する。『木下幸太郎全集』では『「理性」』↓「「理性」」とする。

- (146) Decker, p. 175. 便宜上、第三版・第四版の形を掲げたが、第一版(第40歌)・第二版(第57歌)では措辞に多少の異同がある。ヘロン・アレनによれば、この詩の源泉は、カルカッタ写本の第百七十五番後半句「まず私は理性と信仰に三回の離婚宣告をしよう／そのあと葡萄の娘を妻に娶ろう」*avval se talāq-e 'aql-o dīn khāham goft / pas dokhtar-e raz rā be-zanī khāham kard*. イスラムでは三回離婚宣告をすると復縁できない。Heron-Allen 1899, pp. 86–87.